

# 大宰府史跡

昭和50年度発掘調査概報



昭和51年3月

九州歴史資料館

# 大宰府史跡

昭和50年度発掘調査概報

昭和51年3月

九州歴史資料館

## 序 文

昭和50年度の大宰府調査の対象は学校院を中心として取りあげられた。学校院に関する資料は文献も少く、建物の構造配置などに至ってはこれまでほとんど知られていなかった。ただこの大宰府学校院の推定遺跡から特殊の文様をもつ塼が出土し、その形に長方形、方形、三角形の三種があることが注意されていた。学校院の実態を遺構の上から究明することは、昭和43年大宰府調査指導委員会の発足以来の関心事であった。爾来試掘を経て機会を得、本格的な調査を期待したのであるが、昭和49年度の第36次調査によって推定地の東辺地区から待望の奈良時代の遺構を検出することが出来た。この地区の作業は昭和50年度に引きつぎ続行、更に推定地の中心地区に37次、南辺地区に38次と調査区を設定することが出来た。37次調査では完形長方形有文塼の出土もあり、ここでも奈良時代の建物の多くを検出することが出来た。これ等の知見からすると、将来学校院の跡地に発掘の作業を展開するならば、学校院の旧貌をある程度復元出来るのではないかと思うようになった。ただこの地域の土地は公有化がすすんでおらず、調査と遺構の保存対策が意のままに行われ難い障害がある。

この報告書には学校院以外の緊急調査の対象となった地区の概報もふくまれている。

本来の調査計画が一方で遂行されるとき、臨時応急の処置を要する調査によって勢力がそがれることのないよう、毎年思いを新たにすることである。

終りに調査にあたって地元の援助を賜った方々、学術的な助言指導をおしまれなかった諸賢の変らない温情によって、この調査事業が進展することを祈念してやまない。

昭和51年3月31日

九州歴史資料館館長 鏡 山 猛

## 目 次

序	
I 調查計畫	1
II 調查經過	2
1 概 要	2
2 第36次調查	4
檢出遺構	4
出土遺物	9
小 結	22
3 第37次調查	24
檢出遺構	24
出土遺物	26
小 結	32
4 第39—1次調查	34
檢出遺構	35
出土遺物	38
小 結	43
5 第40次調查	44
檢出遺構	45
出土遺物	46
6 第1次調查補足	46
檢出遺構	47
出土遺物	48
付録 学校院關係年表	49

## 表 目 次

第 1 表	第36次調査出土貨幣	22
-------	------------	----

## 挿 図 目 次

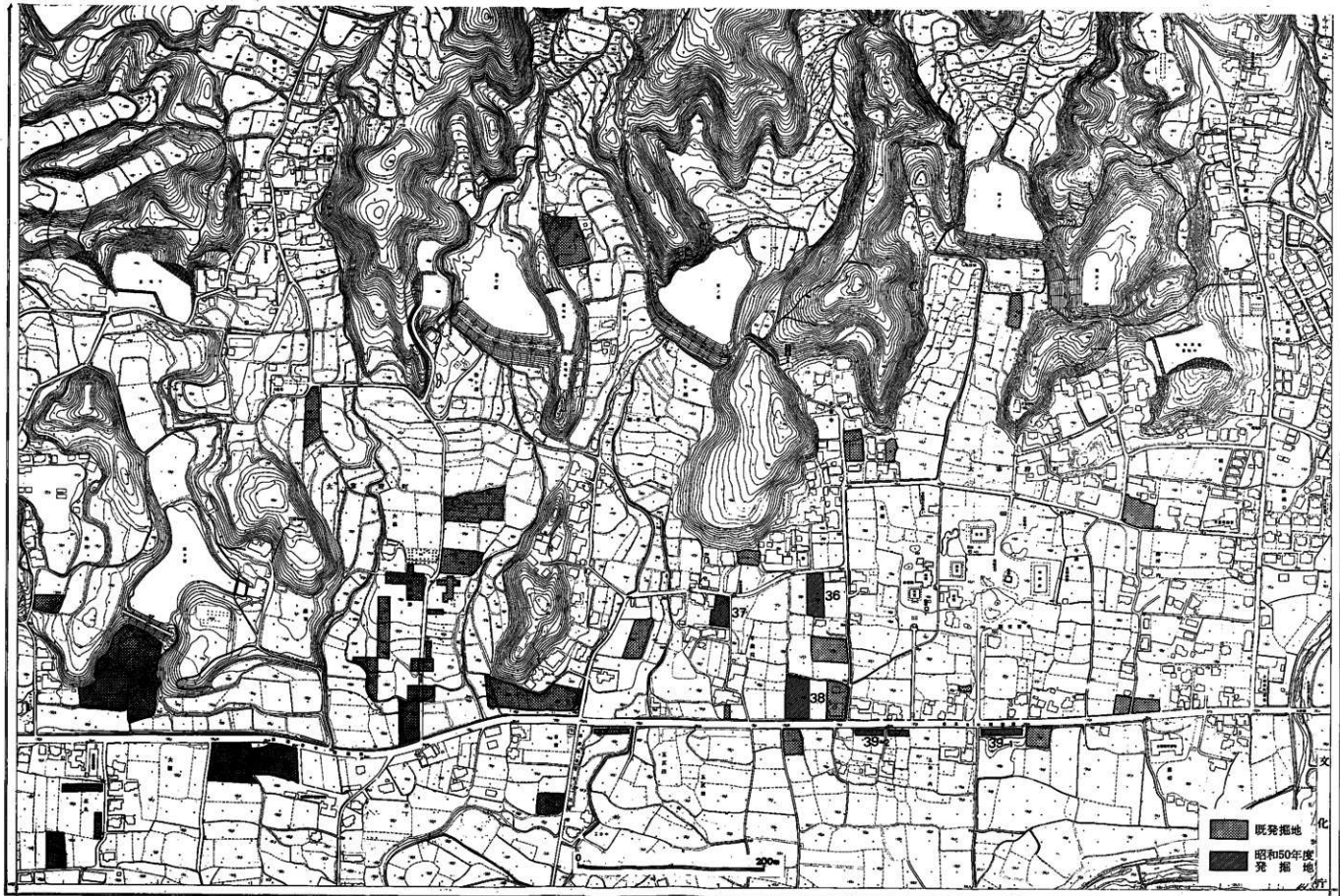
第 1 図	大宰府史跡発掘調査地域	折込み
第 2 図	第36次発掘調査遺構配置	折込み
第 3 図	S E 720 実測	5
第 4 図	S E 725 実測	5
第 5 図	S E 728 実測	6
第 6 図	S E 730 実測	7
第 7 図	S E 735 実測	8
第 8 図	S E 745 実測	8
第 9 図	S X 629 実測	9
第10図	S B 700 柱掘方出土土器実測	10
第11図	S E 720・S E 721出土土器実測	11
第12図	S E 721 出土陶磁器実測	12
第13図	S E 723・S E 724・S E 725 出土土器実測	14
第14図	S E 727・S E 728・S E 729 出土土器実測	15
第15図	S E 730・S E 735・S E 740・S E 745出土土器実測	17
第16図	S X 629 出土土器・鉄釘実測	19
第17図	第36次発掘調査出土三角文様埴拓影	20
第18図	第36次発掘調査出土木製品実測	21
第19図	第36次発掘調査出土貨幣拓影	22
第20図	第37次発掘調査遺構配置	折込み
第21図	S B 765 柱穴実測	24
第22図	S E 771 実測	25
第23図	S E 771・S E 772・S X 754 出土土器実測	27
第24図	S B 765・S B 760・S K 762・S K 781・S D 752・S X 751出土土器実測	28
第25図	第37次調査出土鏡状土製品	30

第26図	S B 765 柱穴出土文様埴拓影	31
第27図	S B 765 柱穴出土文様埴拓影	32
第28図	第37次調査出土硯	32
第29図	大宰府町大字園分出土硯	32
第30図	学校院跡検出遺構配置図	33
第31図	第39-1次発掘調査遺構配置図	34
第32図	S E 867(上)・S E 868(下)実測図	35
第33図	S E 872 実測図	36
第34図	S D 866・S E 867・S E 870・S E 871・S E 872 出土土器実測図	39
第35図	S E 870 出土足駄実測図	43
第36図	第40次発掘調査地周辺図	44
第37図	第40次発掘調査トレンチ配置図	45
第38図	第40次発掘調査出土遺物実測図	46
第39図	中門遺構配置図	47
第40図	南門・中門出土短頸壺実測図	48

## 図 版 目 次

図版 1	(上) 第36次発掘調査全景 (下) S B 700 建物
図版 2	(上) S B 705建物・S E 726井戸・S E 740井戸 (下) S B 710建物
図版 3	(上) S B 690建物 (下) S E 715 建物・S E 725 井戸
図版 4	(上) S E 725井戸 (下) S E 721井戸
図版 5	(上) S E 722井戸 (下) S E 723井戸
図版 6	(上) S E 724井戸 (下) S E 725井戸
図版 7	(上) S E 727井戸 (下) S E 728井戸
図版 8	(上) S E 729井戸 (下) S E 730井戸
図版 9	(上) S E 735井戸 (下) S E 726井戸・S E 740井戸
図版10	(上) S E 745井戸 (下) S E 750井戸
図版11	S X 692墓
図版12	(上) 37次発掘調査全景 (下) S B 775建物・S B 780建物
図版13	(上) S B 765建物 (下) S B 765建物柱穴内文様埴

- 図版14 (上) SA770冊 (下) SX754石組遺構
- 図版15 (上) SE771井戸 (下) SE772井戸
- 図版16 (上) 第39—1次発掘調査全景 (下) SE868井戸
- 図版17 SE872井戸
- 図版18 (上) SE867井戸 (下) SE870井戸
- 図版19 第40次発掘調査全景
- 図版20 (上) 中門全景 (下) 中門階段
- 図版21 (上) 中門東側階段 (下) 中門中央階段
- 図版22 (上) 中門全景 (下) 短頸壺出土状況
- 図版23 第36次発掘調査掘立柱建物SB700・井戸SE720・SE721出土土器
- 図版24 第36次発掘調査井戸SE721出土土器
- 図版25 第36次発掘調査井戸SE723・SE724出土土器
- 図版26 第36次発掘調査井戸SE725・SE728出土土器
- 図版27 第36次発掘調査井戸SE729・SB730・SE735・SE740・墓SX692出土土器
- 図版28 第37次発掘調査井戸SE772・SE771およびSX751出土土器
- 図版29 第37次発掘調査土壇SK762・落ち込みSD752・掘立柱建物SB760SB765出土土器および鏡状土製品
- 図版30 第39—1次発掘調査出土土器
- 図版31 第1次調査補足出土遺物および南門出土遺物
- 図版32 第36次発掘調査出土木製品
- 図版33 第36次発掘調査および第37次発掘調査出土遺物
- 図版34 第37次発掘調査掘立柱建物SB765柱穴出土文様埴



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図



## I 調査計画

昭和50年度の発掘調査は昭和49年度の大宰府史跡発掘調査指導委員会において了承された大宰府史跡発掘調査3カ年計画の2年目にあたる。したがって発掘調査は、この計画に基づいて学校院跡を中心に行うこととし、次の地点について行うよう計画した。

	調査地域	調査期間	調査面積	備考
1	大字観世音寺字学業院 222	5月～7月	600m <sup>2</sup>	学校院中央部
2	“ “ 203-1	8月～11月	1,170m <sup>2</sup>	“ 南辺部
3	“ 字日吉 254-1	12月～2月	1,100m <sup>2</sup>	左第五条二坊

まず(1)の学校院中央部は、これまで方2町とした復原案によると、ほぼその中央に位置し、昭和43年11月大宰府史跡の発掘調査に着手して以来各方面からの発掘調査の要望が強く出されていた場所であったが、土地の公有化が進まず発掘調査が実現していなかった。幸い昭和49年度に土地所有者との間に話し合いがつき公有化されたため、発掘調査を実施することとした。

次に(2)の学校院南辺部については条坊復原により五条に相当する所であり、これまでに22次、27次の調査を行っているが、いずれも住宅建設ともなる事前調査であったため、調査方法にも制約があり遺構の状況を十分に把握するまでにはいたらなかった。したがって今回は条坊遺構の確認調査の一環として行うこととした。

(3)は今回予定地の南において昭和48年度第32次調査として行った住宅建設ともなる事前の調査において掘立柱建物2棟を検出し、この地域に遺構の存在することが確認された。また政庁東南隅における31次、34次、35次の3回にわたる調査において、この地域には、堀によってかこまれた官衙が存在することが明らかとなったが、この堀にかこまれた遺構と推定による五条大路および32次検出の掘立柱建物とが、いかなる関係にあるか究明すべき点として残されている。したがって当該地は指定地外ではあるが土地所有者の承諾が得られたため今年度に調査を行うこととした。

またこれらの調査計画とは別に現在史跡指定地の前面を東西に走る県道山家～関屋線の拡張計画のあることが太宰府町から明らかにされた。このため、その計画について太宰府町当局と話し合いを持ったところ土地買収について若干問題点を残してはいるが昭和51年度には一部工事着手するということが判明したため、これの事前調査を極力行うこととした。

この計画については昭和50年5月26日に開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会において

了承されたため計画どおり調査を実施することとした。

註1	九州歴史資料館「大宰府史跡」	昭和47年度発掘調査概報	1973.3
註2	九州歴史資料館「大宰府史跡」	昭和48年度発掘調査概報	1974.3
註3	九州歴史資料館「大宰府史跡」	第30、31、32次発掘調査概報	1974.8
註4	九州歴史資料館「大宰府史跡」	第30、31、32次発掘調査概報	1974.8
註5	九州歴史資料館「大宰府史跡」	昭和49年度発掘調査概報	1975.3

## II 調査経過

### 1 概要

昭和50年度の調査は昭和49年度事業としての第36次調査（学校院東辺部）が未だ完了していなかったため、これの継続調査を6月7日まで行った。この調査によって掘立柱建物6棟を検出しこの地域には多数の建物が存在することが明らかとなった。

この第36次調査終了とともに学校院中央部において第37次の調査に着手した。

この第37次調査地域は鏡山猛氏による大宰府条坊制の復原によると方2町とされる学校院のほぼ中央に位置している。

学校院跡については現在太宰府天満宮所蔵の伝学校院跡出土の文様場があるが、遺構についてはまったくわかっておらず、大宰府史跡の発掘調査が開始された当初から調査の要望が強かったところである。

調査地周辺はすでに民家がたちこんでおり、また調査地自体も以前に民家が建っていたところでもある。このため排土の処理に若干の困難ともなうため表土は機械力によって処理することとした。遺構検出を6月27日から開始し7月26日に終了した。

この調査でも掘立柱建物4棟を検出したが、特に調査地の南側で検出した建物は南・北に扉を持つ建物と考えられ、しかも柱掘方には文様場を礎板様に使用しているなど注目された。しかしながら建物の一部は調査地外にあり、しかも道路、民家のため正確な規模を遺憾ながら把握できなかった。この調査は9月17日にすべてを終了した。

この間7月17日から作業員を2班に分け学校院南辺部を第38次調査として着手した。この調査は途中で第37次調査地の埋め戻しや農繁期にかかるなどしたため調査期間が延び現在細部の補足調査を継続中である。

この調査では鎌倉時代の礎石建物1棟、井戸12基、中世木棺墓などを検出した。

次に当初の計画では12月から2月にかけて政庁東南隅に接した大字観世音寺字吉254-1の水田について調査を行う予定であった。当該地は指定地外ではあるが調査計画の項でも述べた

ごとく遺構の存在が予想されるとともに条坊制復原のうえからも重要な場所であると考えられるところである。

しかしながらここにおいて県道山家～関屋線の拡幅工事計画が具体化し、一部土地の買収も行なわれたため、この計画を変更し道路拡幅予定地の事前調査に振りかえることとした。道路拡幅予定地は延長約750mに及ぶが調査にあたっては土地の公有化が行なわれた所から着手することとした。

まず10月20日から観世音寺前面の推定左郭五条六坊の地域において調査を開始した。

当該地は現在駐車場として使用されており、旧水田面から約1.2mほどの盛土がなされているため、この盛土を機械力で除去したのも10月24日から遺構検出を開始した。この調査で検出した主な遺構は井戸4基等であり、11月27日終了した。

この県道拡幅工事にともなう事前調査は引き続き左郭五条五坊の部分について調査を継続中である。

次に大宰府史跡環境整備事業にともなう事前調査として10月22日から11月5日まで中門の補足調査を行った。これは昭和43年度第1次調査として中門・南門の調査を行った際、これら門の基壇のほぼ中央部が道路であったため未調査であった部分であり、今回の補足調査によって中門の調査は完了したことになる。このほか住宅建築等にかかわる事前調査として3件の調査を行った。このうち水城跡における調査は現在も継続中である。

昭和50年度の発掘調査地を地区別に別記すると、下記の表のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	備 考
36	6 Z G K	720	75. 2. 3～75. 6. 7	学校院東辺部
37	6 Z G K	480	75. 6. 7～75. 9. 17	“ 中央部
38	6 Z G K	840	75. 7. 19～	“ 東南部
39-1	6 A Y E - C	155	75. 10. 20～75. 11. 27	県道拡幅工事に伴う事前調査
39-2	6 A Y E - D	270	76. 2. 2～	“
40	6 A Y B - B	280	75. 11. 11～75. 12. 10	店舗建設に伴う事前調査
1補	6 A Y T - B	80	75. 10. 22～75. 11. 5	環境整備に伴う調査
—	御笠団印出土地	60	75. 10. 16～75. 10. 18	住宅建設に伴う事前調査
—	6 A M K (水城)	560	76. 1. 19～	“

以上の発掘調査のうち第38次、第39—2次、および水城跡については現在も調査を継続中であるので報告は次回にゆずる。また御笠団印出土地の調査については顕著な遺構は認められなかったため報告は省略する。

註1 福岡県教育委員会「大宰府史跡」昭和42年度調査概報 1969. 3

## 2 第36次調査

学校院東辺部の調査は昭和46年度に第9次調査として約900m<sup>2</sup>について調査を行っている。この第9次調査では掘立柱建物1棟、平安時代後半から鎌倉時代にかけての井戸12基、溝5条などを検出している。今回の調査地は、この第9次調査地の北にあたり、地形的にも、ほぼ同一のレベルである。地番は大字観世音寺字学業院201-1番地である。

調査は昭和50年2月3日から開始した。表土の除去にあたっては当該地が私有地（水田）であるため人力によることとした。このため遺構検出は若干おくれたが2月17日から開始し3月25日終了した。写真撮影、実測図作成ののち4月23日から5月16日まで掘立柱建物、井戸等の補足調査を行った。

### 検出遺構

第36次調査において検出した主な遺構は掘立柱建物6棟、井戸15基、中世墓1基、その他多数のピット群などである。以下これらの遺構について述べる。

#### 掘立柱建物

**SB 690** 発掘区北半部で検出した2間×2間の総柱建物で北でやや東に振れている。柱間寸法は南北方向で2.25m（7尺5寸）、東西方向1.95m（6尺5寸）、である。柱掘方は一辺が90cm前後の方形である。

**SB 695** 発掘区中央部の東寄りで検出したもので南北方向に柱穴3個を検出したのみである。東西棟建物と考えられるが規模については不明である。

**SB 700** 発掘区中央部で検出したもので2間×6間以上の東西棟建物である。柱間寸法は桁行1.95m（6尺5寸）、梁行3.0m（10尺）である。柱掘方はきわめて不揃いで一辺が1～1.4mの方形である。また柱掘方から長頸壺の胴部が出土している。この建物とSB705およびSB710は柱掘方が切り合っており、三者の中では最も古い建物である。

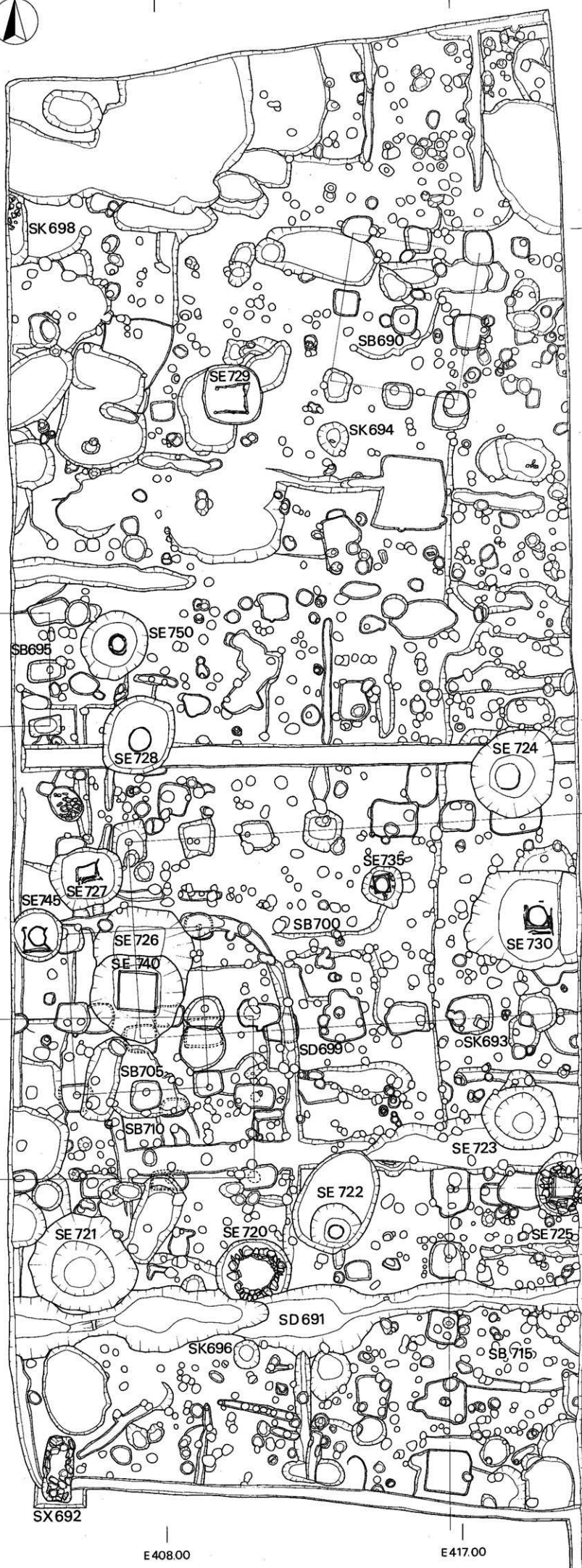
**SB 705** SB690と同じ規模の建物であるが、南北方向の柱間寸法が若干広く2.4m（8尺）である。またSB690は北で東に振れるのに対して、この建物はやや西に振れている。したがって時期的には異なるものと考えられる。柱掘方の切り合いからSB710よりは新しい時期のものである。

**SB 710** 2間×3間以上の東西棟建物で柱間寸法は桁行2.3m（約7尺5寸）、梁行2.40m（8尺）である。柱掘方は1.0×0.6mのやや長方形で、SB705と切り合っている。

**SB 715** 発掘区東南隅で検出したものである。1間以上×4間以上で大半は発掘区外へのびている。南北棟建物と考えられる。柱間寸法は南北・東西方向とも2.1m（7尺）である。柱掘方は比較的大きく一辺が約1.2m前後の方形である。



第2區 第38次地籍調查地籍圖



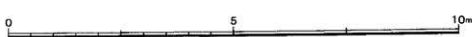
N115.00

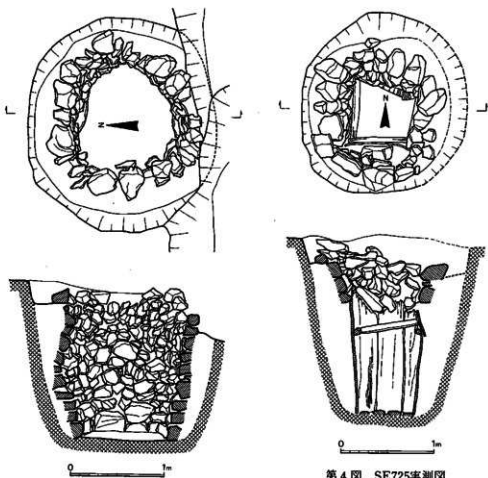
N100.00

N 81.00

E408.00

E417.00





第3図 SE720実測図

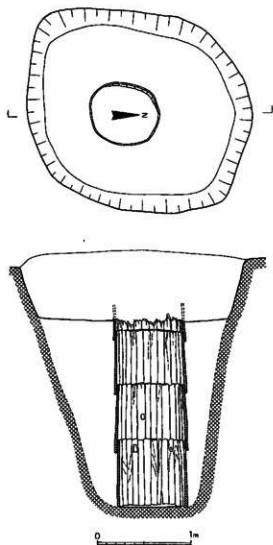
第4図 SE725実測図

#### 井 戸

**SE 720** 石組みの井戸である。人頭大の花崗岩を使用している。直径約1.2mの円形で深さは約1.5mである。掘方は上縁で2.3mの円形である。埋土から検出した土器から今回検出した井戸の中では最も新しく室町時代のもと考えられる。

**SE 721** 発掘区西南隅で検出したもので、枠板はすべて抜き取られている。この枠の形態は不明である。掘方は上縁で南北3m、東西3.2m、底部は0.9m内外で不整形である。深さは遺構面から約2.3mである。埋土から多量の土器を検出した。

**SE 722** 掘方は上縁で1.5m内外の不整形で深さ1.4mの比較的小規模な井戸である。底には直径45cmの曲物を据えている。曲物の板材は厚さ3mm、幅30cmで桜皮でとめてい



第5図 SE728実測図

る。曲物の上部にはさらに桶様の枠を据えたと考えられるが、すべて抜取られている。

**SE 723** SB 715の北で検出したものである。掘方は上縁で $2.3 \times 2.0$  m、底は $0.6 \times 0.65$  mの楕円形で深さは1.6 mある。枠板はすべて抜き取られているが、掘方底の形態からみて桶様の枠を使用したものと考えられる。

**SE 724** 掘方は上縁で $2.5 \times 2.6$  m、底は $1.4 \times 1.3$  mの楕円形で深さは2.8 mである。枠板はすべて抜き取られているが、掘方底近くに竹の「タガ」が一部残っており桶様の枠を使用したものである。

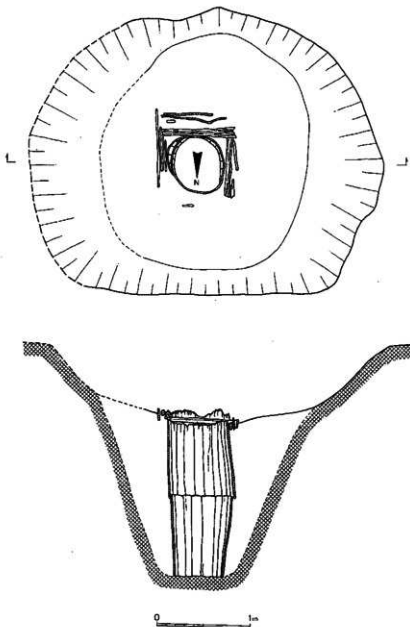
**SE 725** 発掘区東南隅で検出したもので掘方はSB715の柱掘方を切って構築されている。掘方は一部発掘区外へ伸びているが、約1.9 m前後の円形である。枠板は深さ1.2 m、幅30 cm、厚さ2.5 cm程度の板を縦に列べ、横棧で固定している。一辺が約70 cmの方形である。この枠板の上部にはさらに人頭大の石を構築しており深さ約50 cm程度が残っている。この石組みの一部に文様埴を使用している。また底の一部には玉石を敷いている。

**SE 726** SE 740を切って構築されたものである。掘方からみてSE 740と同規模の井戸と考えられる。枠はすべて消失しているが、掘方の底が方形になっているところからみて、方形の枠であったと考えられる。

**SE 727** SB 700の柱掘方を切って構築された方形の井戸である。掘方は上縁で $1.8 \times 2.2$  mの楕円形で深さは約1.5 mある。枠板は内側へくずれおちており、正確な規模は不明であるが一辺が約70 cm程度と思われる。

**SE 728**

掘方は上縁で2.6×2.1mで隅丸方形に近い。深さは2.7mである。枠は直径75cm深さ70cmの桶様ものを4段重ねている。最上段の枠は下端部を若干残すのみで、大半が消失している。また最下段の枠板の上端部近くに5×8cm程度の方形の穴を数カ所に設けている。おそらく湧水を井戸枠内へ導くための施設であろう。

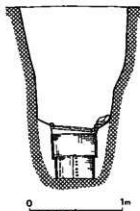
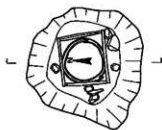


第6図 SE730実測図

**SE 729** 掘方は上縁が1.8×1.85mの隅丸方形で、深さは約1.8mの規模のものである。枠は幅が30～50cm、厚さ2cm内外の板を2～3枚を縦にして方形に組み横棧でとめている。

**SE 730** 発掘区東辺中央部で検出したもので、掘方は比較的大きく、上縁は南北で約3m





第7図 SE735実測図

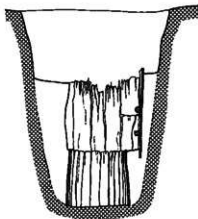
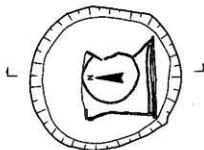
で一部は発掘区外へのびている。枠は直径70cm、深さ85cmの桶様のものを二段重ね、さらに、その上部に縦板を使用した方形の枠を据えているが、

ほとんど消失しており、わずかに横棧と板の下端部を残すのみである。横棧の遺存状況からみると、この方形枠は一辺が約85cm程度の規模のものである。

**SE 735** 今回検出した井戸の中では最も小型のもので掘方は1.2×1.3mの不整形円で、深さ約1.7mの規模である。底に二段重ねの曲物を据えている。下段の曲物は直径40cm、深さ25cm、上段はやや大きく直径50cm、深さ28cmである。この曲物の上部には、さらに一辺が50cmの方形の横棧が残っており、曲物の上部には方形の枠が据付けられたと考えられる。

**SE 740** SE726を切って構築されたもので掘方は上縁で2.8×2.6mの不整形形である。枠はほとんど消失しているが底に横棧が残っており、これから一辺が1.2mの方形の枠であったと考えられる。またこの井戸の掘方はSB710の柱穴を切っている。

**SE 745** SB705の柱掘方を切って構築されたもので掘方は比較的小さく直径1.6mの円形である。枠はSE730と同様に最下部に直径70cmの桶様の枠を据え、その上部に縦板を横棧でとめた方形の枠をのせている。この上段の方形枠板のうち西側のものを除いては、幅が20



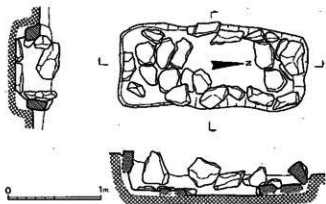
第8図 SE745実測図

cm、厚さ2cm、長さ80cmの板を横棧で固定したものであるが、西側の枠は戸板を転用している。この戸板は長さ約65cm程度のものであるがその構造を良く知ることができる(図版33)。「舞良戸」とよばれるものであろうが、両側および上・下端を一边が3.2cmの角材で枠(框)を組み、その中に幅11~12cm、厚さ3~4mmの板を敷きならべ横棧で表・裏から固定している。この横棧は幅3.5cm、厚さ1cmで約6.5cm間隔で設けられている。材質はすべて杉と考えられる。

**SE750** 掘方は上縁が2.1×2.0mの不整形円で、深さは約1.6mである。底に直径50cm、深さ30cmの曲物を据え、その上に直径65cm前後の桶椽の枠の枠をのせている。曲物と上段の桶椽枠の間には瓦をつめている。

#### その他の遺構

**SX 629** 発掘区西南隅で検出した鎌倉時代の墓である。ほぼ南北に2.0×0.85mの墓塚を掘り、その底に人頭大の花崗岩の自然石を2列に敷い



第9図 SX629実測図

ている。中央部の数個は抜き取られている。さらに四周には同規模の石を置いて壁をつくり一種の石椁状を呈している。人骨は全然残っていないが敷石上面近くの埋土から鉄釘7本を検出した。おそらく遺骸は直接石組内におかれたのではなく、木棺に収めたものを埋葬したものと考えられる。また埋土からは副葬品と考えられる甕泉窯の青磁碗と土師器の小皿を検出した。

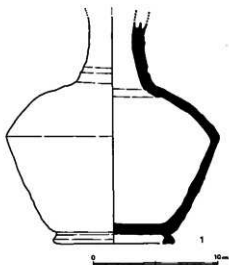
註1 福岡県教育委員会『大宰府史跡』第9、10、11次発掘調査概要 1971.9

#### 出土遺物

出土遺物は土器・瓦埴類・木製品・貨幣・鉄釘等である。そのうち土器の出土は顕著でその量はかなりの量にのぼる。瓦埴類はそれに比較すると少ないが文様埴の出土は第37次調査同様目立っている。遺物の出土状況を見ると、遺構に伴う一括遺物として14基の井戸と木棺墓から出土したものがあげられる。以下掘立柱建物の柱穴、それに井戸および木棺墓の遺物について述べる。

#### 掘立柱建物(SB 700)柱穴出土土器(第10図1、図版23)

須恵器 (1) は長頸壺で、頸部の下半と体部は完全に残っている。頸部は下半部がすばまり上方へ外反しつづのびるものと考えられる。頸部から胴部へはなだらかな曲線をもち、内彎す



第10図 SB700柱掘方出土土器実測図

おむね淡茶灰色を呈する。底部から口縁部へかけて内彎気味で、底部切り離しは糸切りである。

以下底部の切り離し手法については単に「糸切り」「ヘラ切り」と記述する。

(6) は坏で復原口径 13.0 cm、器高 2.6 cm、底径 9.0 cm である。胎土は粗い砂を含み淡茶灰色を呈する。その他に底径 2.4 cm で体部がうすく、喇叭状に開くものがある。すべて糸切りである。

井戸 (SE 721) 出土土器 (第 11・12 図 7~47、図版 23・24)

土師器 検出した井戸中最も出土量が豊富な井戸である。(7)~(13)・(17)~(27) は小皿である。(7) はヘラ切りで他は糸切りである。(7) は口径 9.4 cm、器高 1.0 cm でやや丸底である。(8)~(10) は小型で口径 7.2~7.6 cm、器高 0.9~1.3 cm、底径 6.0~6.4 cm。(11)~(13)・(17)~(27) は口径 8.8~9.8 cm、器高 0.8~1.4 cm、底径 6.4~7.4 cm の範囲のもので、ほとんど淡茶灰色で底部に糜状圧痕がある。(14)~(16) は高台付小皿で量は少ない。口径 7.4~10.6 cm、器高 1.4~2.0 cm のものである。細砂を含むが硬質のものである。(28) は大型の台付皿で復原口径 20.0 cm、器高 4.3 cm、胎土には細砂を含むが硬質のものである。(29)~(35) は坏で若干形状が異なる。(29) は小型で復原口径 11.2 cm、器高 2.0 cm で糸切りと思われる。(30)~(33) は口径 15.0~15.9 cm、器高 2.6~3.1 cm、底径 10.0~10.3 cm。(34) (35) は大き目で口径 16.2~17.8 cm、器高 2.7~3.3 cm、底径 10.0~11.5 cm のものである。細砂が混入し、淡茶白色を呈し、全て糸切りである。

陶磁器 (36)~(40) は白磁の碗である。口縁部の特徴から 2 タイプに分けられ、(36) (37)

る肩部から鋭角に屈曲し胴部にいたる。胴部はほぼ直線的で底部は平らである。肩部と胴部の境界には明瞭な稜をもっている。高台は低く端部が広がった台形状のものである。底部から胴部中位まで回転ヘラ削りの再調整を行ない、また底部は横ナデ調整を施している。体部と頸部の接合構成は明確でない。胎土は粗い砂を含むが、焼成は堅緻である。明灰色を呈する。これは柱穴埋土の上層で横になった状態で検出した。

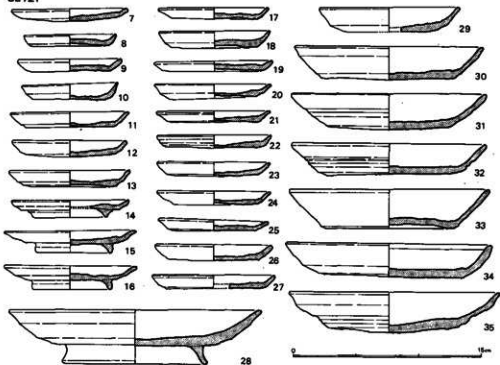
井戸 (SE 720) 出土土器 (第 11 図 2~6、図版 23)

土師器 (2)~(5) は小皿で口径 6.2~6.6 cm、器高 1.8~2.0 cm、底径 3.9~4.2 cm のものである。胎土は細砂を含むが比較的硬質のもので、お

## SE720



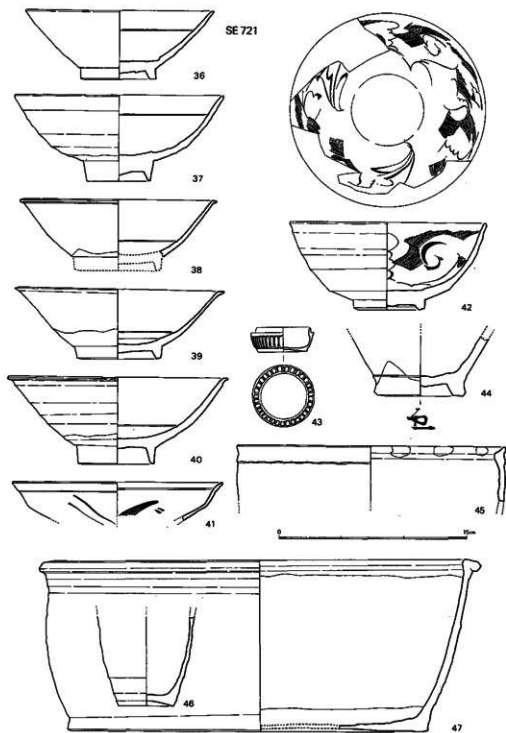
## SE721



第11図 SE720, SE721出土土器実測図

はそのまま円くし、(38)~(40)は「く」の字状に外反させ 端部を水平にしている。とくに(40)には輪花がある。釉は(36)では黄色味の白色であり、(37)は緑灰色気味の白色である。(38)(39)は(40)に比べやや小型で高台にも差異がみられる。(39)の口径は17.2cm、器高5.6cm、高台径6.7cm、(40)は口径17.8cm、器高7.0cm、高台径6.1cmである。釉は高台部を除いて全面に施釉され、(38)(39)はやや黄色味の灰白色で、(40)は灰白を呈し貫入がみられる。

(41)(42)は青磁である。(41)は小片のため器形は不明で体部中位で「く」字状に屈曲させ口縁部は軽く外反させる。内面には一部櫛目の文様がみられ、釉は灰色を帯びた深緑色を呈する。(42)は体部内面の全面に櫛目とヘラ描きの文様がある。口径15.8cm、器高7.1cm、高台径5.6cmで高台部を除き全面に施釉され、釉色はやや黄味の緑色を呈する。



第12图 SE721 出土陶磁器实测图

(43) (44) は青白磁で、(43) は合子の身の部分である。完形で口径4.2cm、器高2.0cm、底径4.0cmをはかる。外体部には蓮華座のスタンプ（弁は33個）がある。蓋受け部分と底部から体部下半には釉がかかっている。釉色は粉青色を呈する。(44) は壺の底部で釉は底部にはかからず、他はやや厚目の灰青色の釉がかかっている。また高台の見込みには墨書がみられるが判読できない。花押かと思われる。

(45) は褐釉のもので器形は不明であるが盤状のものと思われる。胎土は淡赤色を呈し褐色の釉がかかっている。口端部には重ね焼きの目跡がみられる。(46) は淡黄緑色の釉がかかった全体にうす形のものである。底部と内面には施釉されない。この他に大形のものが1点ある。(47) は黄釉の盤で復原口径35.0cm、器高14.0cm、底径26.6cmである。胎土は砂粒の混入が目立ち粗く、灰白色ないし淡茶白色を呈する。釉は内面でうすく斑でやや茶色気味の淡黄色を呈し、口縁部付近は施釉されていないが、茶灰色を呈する。外面では茶色の強い黄緑色の釉がかかっている。口縁部には重ね焼きの目跡がある。

以上、述べた他に瓦器の小片が数点ある。

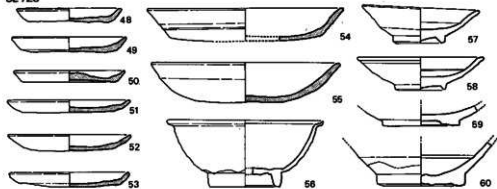
#### 井戸 (SE723) 出土土器 (第13図 48~61、図版25)

土師器 (48)~(53) は小皿で、口径9.0~9.7cm、器高0.9~1.3cmのものである。(48) は糸切りで他はヘラ切りである。おおむね淡茶灰色を呈し、籬状瓦痕を有する。(54) (55) は杯で口径15.0~15.6cm、器高2.7~3.3cmである。胎土は精製されて淡灰褐色を呈する。(55) は丸底のものであり、ともにヘラ切りである。

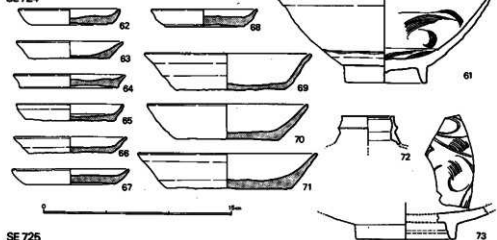
磁器 (56)~(61) は白磁の碗である。(56) はSE723とSE750出土の破片が接合したものである。ずんぐりとした高台に器内のうすい体部がやや内彎気味に立ち上がり、口縁部を「く」の字状に折り曲げ端部は上に擠み上げている。胎土は灰白色で釉色は淡緑色気味の白色を呈する。また見込みには段をもっている。(57) (58) は同種のもので口径9.3~10.0cm、器高2.6~3.0cm、高台径4.0cmである。胎土は灰白色で釉は外体部下半から底部にはかからず、また内底には幅1.0cmで蛇の目状に釉が掻き取られている。釉色はやや緑色気味の灰白色を呈し、内面体部中位に沈線があり、貫入がみられる。(58) はSE723とSE721出土の破片が接合したものである。(59) はいわゆる蛇の目高台のものである。胎土は非常に精良で緻密なもので、釉色はほぼ純白に近く、光沢がある。壺付から底部中心には施釉されていない。

(60) は削り出しの浅い高台で、玉縁の口縁をもつ碗と思われる。高台部には釉はかかっている。内底近くに沈線がある。(61) は高台の削り出しが深く、壺付が細くなる。体部は内彎気味で口縁部は外反させて端部を平らにしている。口径18.0cm、器高7.5cm、高台径6.5cm、高台高1.4cmである。内体部には櫛目による文様がある。釉色は黄色がかかった濁白色を呈し、外面の体部下半から底部には施釉されていない。

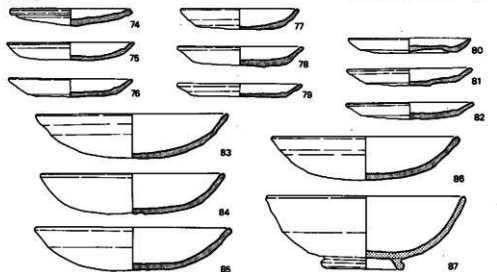
SE 723



SE 724



SE 725



第13图 SE723, SE724, SE725出土土器实测图

井戸 (SE724) 出土土器 (第13図 62~73、図版 25)

土師器 (62)~(68) は小皿で、口径 8.0~9.3 cm、器高 1.0~1.4 cm、底径 6.0~7.7 cm のもので口縁部をわずかに筒み上げた感じのものが目立っている。胎土は粗いものでやや赤味のある褐色を呈している。すべて糸切りで簾状圧痕を有する。(69)~(71) は坏で口径 12.8~14.2 cm、器高 2.9~3.0 cm、底径 8.0~9.8 cm のもので、(71) はやや大きい。体部は直線的で外上方にのびる。胎土は粗いが硬質のものである。糸切りで簾状圧痕を有する。おおむね淡褐色を呈する。

磁器 (72) は青白磁で水注か瓶の口縁部と思われる。口頸部中位に稜をもつ。緑がかった青白色を呈する。(73) は白磁の小片で、全形は不明であるが、高く直立した高台をもっている。内底面には柵目とヘラの花文がある。胎土は白色の緻密なもので釉はうすく黄色ないし空色を帯びた白色を呈する。外底部中心には施釉されていない。

井戸 (SE725) 出土土器 (第13図 74~87、図版 26)

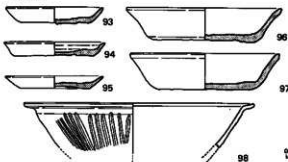
土師器 (74)~(82) は小皿で、全てヘラ切りである。(74) は特殊なものである。口径 9.4~10.0 cm、器高 1.1~1.6 cm のもので底部に円味をもつものが多い。全てに簾状圧痕がある。(83)~(86) は坏で、口径 14.6~15.6 cm、器高 3.2~3.5 cm のもので丸底で円弧状を呈する。底部と体部の境が明瞭でなく、内面はヨコナダ後ヘラ状のものでミガいている。一部にヘラの当りがみられるものがある。この種の坏は例外なく胎土は精製され硬質のものである。淡茶灰色を呈する。

黒色土器 (87) は内外面黒色の碗である。復原口径 15.8 cm、器高 5.9 cm、高台径 6.5 cm のもので、ずんぐりした円味のある高台に、円味のある体部から口縁部は直線的で、端部を円

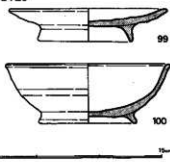
SE 727



SE 728



SE 729



第14図 SE727, SE728, SE729出土土器実測図



くおさめている。内外面の全面にミガキがあり、内底面は粗いミガキである。

この他に若干であるが埋土の上層から糸切りの土師器の小皿が出土している。

#### 井戸 (SE 727) 出土土器 (第 14 図 88~92)

土師器 (88)~(90) は小皿で、全て糸切りである。口径 8.8~9.2 cm、器高 1.1~1.3 cm、底径 6.2~7.4 cm のものである。淡茶色ないし茶褐色を呈する。(91) (92) は坏で、ヘラ切りのものであり、底部はやや円味をもつが、体部との境界は明瞭である。口径 15.1~16.2 cm、器高 2.6~3.4 cm、底径 11.0~12.0 cm である。胎土は精製され、硬質のものである。淡茶灰色を呈する。図示しなかったが、口径 19.0 cm の大きさのものもある。

#### 井戸 (SE 728) 出土土器 (第 14 図 93~98、図版 26)

土師器 (93)~(95) は小皿で、口径 7.8~8.8 cm、器高 1.0~1.4 cm、底径 5.6~6.2 cm のもので、全て糸切りである。(96)~(97) は坏で、口径 12.0~12.4 cm、器高 2.6~2.9 cm、底径 8.0~8.1 cm のものである。体部中位から口縁部に至ってやや外反する。全て糸切りであり、煎状圧痕を有する。

青磁 (98) は青磁の碗で、口縁部を「く」字状に外反させ端部を平らにし平縁としている。小片であるが復原口径は 19.4 cm である。体部外面には櫛目状に幅広のヘラ文様がある。釉色は灰色を帯びた緑色を呈する。その他に瓦器の小片がある。

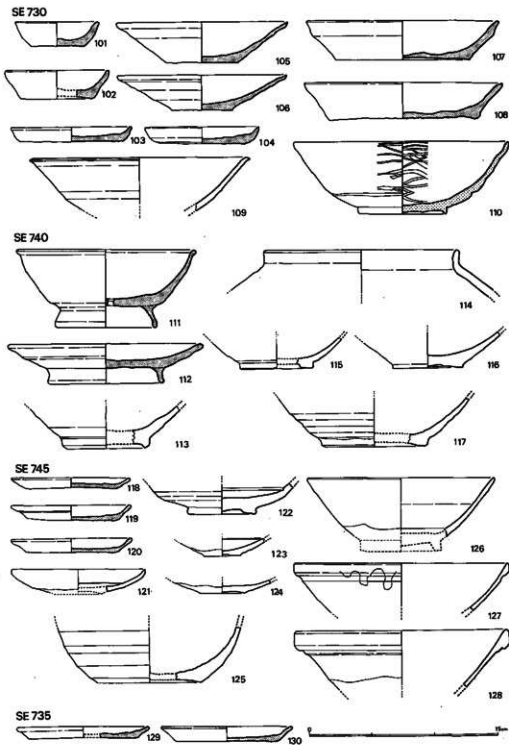
#### 井戸 (SE 729) 出土土器 (第 14 図 99・100、図版 27)

土師器 (99) は高台付の皿で口径 12.6 cm、器高 2.6 cm、高台径 7.6 cm、高台高 1.2 cm である。口縁部はやや外反気味で端部を円くしている。浅い皿にやや開き気味の高台を付けている。胎土は砂を含まず茶白色を呈する、やや軟質の土器である。(100) は堦で口径 13.0 cm、器高 4.8 cm、高台径 7.8 cm のものである。体部中位は円味をもち口縁部はわずかに外反させ端部を円くおさめている。高台はふんばり安定した感じである。胎土には砂を若干含み、硬質で淡茶白色を呈する。

この他に井戸中から黒色土器 B が出土している。

#### 井戸 (SE 730) 出土土器 (第 15 図 101~110、図版 27)

土師器 (101)~(104) は小皿で全て糸切りである。(101) (102) は井戸埋土の上層から出土したもので口径 6.6~8.2 cm、器高 2.0~2.3 cm、底径 4.2~5.8 cm である。(103) (104) は口径 9.0~9.6 cm、器高 1.2~1.4 cm、底径 7.0~8.2 cm のものである。ともに胎土は砂粒が混入し粗いが焼成は硬質である。おおむね淡茶灰色ないし淡茶褐色を呈する。(105)~(108) は坏で全て糸切りで (105) (106) は埋土の上層から出土したものである。口径 13.4~13.6 cm、器高 2.9~3.3 cm、底径 4.7~5.6 cm のものである。底径と口径の差が大きく、体部は大きく開き喇叭状になる。(107) (108) は口径 15.2~15.6 cm、器高 3.0~3.2 cm、底径 10.6~11.5 cm のもので、おおむね茶灰色を呈する。底部は煎状圧痕を有する。



第15图 SE730, SE735, SE740, SE745出土土器实测图

磁器 (109) は白磁の筒である。やや内彎気味の体部から口縁部はわずかに外反し、端部を平らにしている。復原口径は約 17.6cm 位である。灰白色の釉がうすくかかっている。

瓦器 (110) は塊で、底部から体部にかけて内彎し、口縁部は強い横ナデのため内面がへこんでいる。高台は低い不安定なものである。ヘラミガキは内面体部中位以下はジグザグ状に内外面中位以上は横方向に粗雑なミガキを行っている。外面中位以下は雑なヘラ削り調整である。外体部下位に接合痕かと思われるものがある。

この他に須恵器系の甕が出土している。

#### 井戸 (SE740) 出土土器 (第 15 図 111~117、図版 27)

土師器 (111) は塊で口径 14.2cm、器高 6.2cm、高台径 8.0cm、高台高 1.7cm のものである。底部から体部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。口縁部を外反させ、端部は肥厚させ円くしている。高台は外へ開き、端部は内側へはிரり円くおさめている。胎土は精製され焼成は硬質で赤褐色を呈する。体部および高台に部分的であるが煤状のものが付着している。また底部中心に径 5mm の穿孔がみられる。(112) は高台付の皿で、口径 15.4cm、器高 3.2cm、高台径 9.2cm、高台高 1.2cm である。SE729 出土の (99) とほぼ同じであるがやや (112) が大きく、皿部が浅い。土師器としてこの他に埋土上層から丸底の坏が出土している。

陶磁器 (113) (116) (117) は越州窯産の筒である。(113) は小片のため疑問があるが釉色の感じから一応越磁とした。低くやや肉厚の高台で胎土は黄白色を呈し、釉色はやや黄色味を帯びた茶色を呈する。内底には重ね焼きの目跡があり、壺付には施釉されていない。(116) は幅広の蛇の目高台で淡黄色を呈する。壺付きには重ね焼きの目跡がある。高台径 5.6cm である。(117) は無高台で底部はあげ底になっている。釉色は淡黄色を呈し、底部は施釉されていない。内底には前者同様目跡がみられる。(115) は白磁の甕でいわゆる蛇の目高台を有する。純白に近い釉がかかれ、光沢がある。

灰釉陶器 (114) は灰釉の壺と思われるもので復原口径 15.6cm で、頸部は直立し口縁端部は円くおさめている。胎土は灰白色を呈しているがやや粗い。頸部と肩部の外面上にはうす目の灰緑色の釉が斑にかかっている。肩部の内面には施釉されていない。

#### 井戸 (SE745) 出土土器 (第 15 図 118~128)

土師器 (118)~(120) は小皿で、ともに糸切りで、口径 9.4~9.6cm、器高 0.9~1.1cm、底径 7.0~7.4cm である。器高が低く口縁部がやや肥厚し端部を円くする。淡茶褐色ないし茶灰色を呈する。籬状圧痕を有する。

陶磁器 (121) は器肉のうすいもので、口縁部を内彎させ、端部はうすく直上に積み上げている。胎土は灰白色を呈し、釉は淡黄灰色である。体部下位の底部付近は施釉されていない。(122) は越州窯産のもので全形は不明であるが、体部中位で稜をつけて屈曲し、内面に沈線がある皿形の形態と思われる。高台は短く削り出した輪状のもので、釉は内外面に施され、淡黄

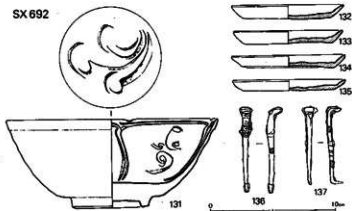
緑色で貫入が認められる。胎土は灰白色を呈し、壺付に重ね焼きの目跡がある。これは井戸埋土上層から出土したものである。(123) (124)は器内のうすい皿状のもので底部中心がへこみあげ底となっている。底径3.0～3.6cmの小さなもので体部は大きく外方へ開く。内面体部中に細い沈線がある。胎土は灰白色で釉は外面の体部下位から底部にはかからず、釉色は淡黄緑色を呈する。(125)は全形を知り得ないが、淡黄緑色の釉がかかかっており、いわゆる褐釉の壺と考えられる。底部はあげ底状で、外面体部はへら削りが明瞭で、内面は粘土紐痕がみられる。白色の胎土で底部および内面には釉がかかっていない。(126)～(128)は白磁の碗で、井戸枠中より出土した。(126)は体部から口縁部にかけてほぼ直線的で端部は円くなっている。内底の見込みの部分は蛇の目状のへこみがみられる。釉は外面体部下半には施釉されておらず淡灰黄緑色を呈する。(127) (128)は口縁部を玉縁にするもので(127)は玉縁が小さい。ともに黄色味の強い白色を呈する。

井戸 (SE735) 出土土器 (第15図129・130、図版27)

土師器 いずれも小破片で(129) (130)の小皿は復原口径10.4cm、器高0.9～1.2cmのもので、へら切りである。

木棺墓 (SX692) 出土遺物 (第16図131～137、図版27)

磁器 (131)はほぼ完形に近い青磁の碗である。内面体部をへら描きの二本線で5つに区画し、さらにその間にはうず状の花文がある。また見込みにもへら描き文が施されており、口縁端部には5つの割花がある。釉は外底部を除いて全面にかかかっており、釉色は淡緑色を呈する。内外面に貫入がみられる。口径17.7cm、

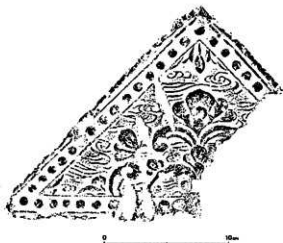


第16図 SX629出土土器・鉄釘実測図

器高7.1cm、高台径6.0cmである。

土師器 (132)～(135)の小皿は口径8.8～9.0cm、器高1.0～1.1cm、底径7.0cmのものである。全て糸切りで胎土は若干砂を含み焼成は硬質であり、おおむね淡茶灰色を呈する。

鉄釘 (136) (137)は鉄釘で、石組内から出土した。全部で14本出土している。そのほとんどに木質が残っていた。断面は正方形のものと長方形のものがあり、頭部は直角に折り曲げうすく平らにしている。完存しているものは少ないが、保存の良好なものは断面3×3～4×5mm



第17図 第36次発掘調査出土三角文様埴拓影

これらは主に学校院跡を中心に普遍的な出土をなし、最近では福岡市東区多々良・込田遺跡<sup>113</sup>からも発見されている。

これらの文様埴は方形埴（宝相華文様）、長方形埴（唐花文様）、唐花文三角埴の三種に別れ、文様は花文、水波文、曜唐文、珠文の四文様から構成されており、さらに長辺、短辺、厚さなどが各々等しい共通性をみることができる。又その表現法も新羅文様埴のように豊麗で微細な感覚に相対し、簡素で日本化した意匠を見い出すことができる。

第17図は観世音寺蔵のものと同種であるが、それに比較して保存がよく、SE740の埋土中から他の2種と共に出土した。規格性の整った直角二等辺三角形を呈し、対辺約33.5cm、直角をはさむ二辺24cm、厚さ6cmを測る。文様は対辺中央から、曜唐花文に向けて左右に華麗な花文が派生し、その間をシャープな水波文が漂う。曜唐花文は方形・長方形埴に比して簡素である。又水波文を配するもの、これらの文様埴の特徴といえよう。この他SE725、柱穴、ビットなどから出土した。

文様の様相からは奈良時代と思われるが、その具体的な性格等についての知見は無にひとしく、又学校院跡を中心として発見される特色などは、今後の調査に期待するところが大きい。他に軒丸瓦片11個、軒平瓦片12個、文字瓦13個が出土した。

#### 木製品（第18図、図版32）

今回出土した木製品はすべて井戸からである。

(1) 木椀 SE730出土で全体の1/4を欠損する。口径15.6cm、高さ5.6cm、器体はやや厚く0.9cm程である。征目の材が使用され、内面はロクロ挽きで、体部は内彎ぎみにくり抜かれている。外面は磨滅しているためロクロ挽きかどうかは不明である。外面中位下に、手持

のもので、長さ6.4~7.0cmのものである。

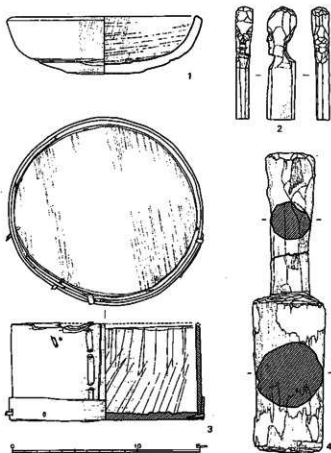
図示しなかったが、その他にSE722井戸からは土師器の小皿と瓦器の小片が出土している。またSE750井戸からは白磁の碗と青磁片が数点出土している。

#### 瓦埴類（第17図、図版33）

今回出土した瓦埴類の中では特に文様埴が多い。文様埴は古く中山平次郎氏が「古瓦類雑考」中に三種類紹介しており、これまでの調査でも第30・31次等から出土している。そ

ちの横削りによる沈線状の段がつく。内外面は黒漆らしい塗膜がある。

(2) 人形 SE724 出土で完形品である。長さ9.0cm、幅2.3cm、厚さは頭頂部で1.3cm、胴下半で1.0cmを測る。棒状の柱目材を鋸状のもので切断し、頭頂部は両側辺から削り、首部は各側辺にくり込みを入れてつくりだしている。顔面は縦の方向に2本の稜線が入り3面に面取りされ、眉、目、鼻、口が刻まれている。加工、表現とも細かく立体的である。人形は平城宮跡などで出土例がある。その多くは、薄い平板の側辺にくり込みを入れ、人の正面ないし側面を形どり、刻みまたは墨書によって顔面を表現していて、平面的なものである。

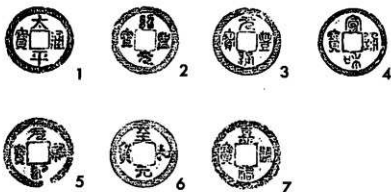


第18図 第36次発掘調査出土木製品実測図

今回の出土品のように、正面側面とも意識される立体的な例は、鳥羽離宮跡、藤原宮跡で認められるが数は少ない。平板でつくられた人形は祭具、呪具として用いられている。棒状のものは同様な用途と解すべきか不明である。今回は井戸内より出土したのであるいは降雨湧水の祈願などの祭祀と関連するかもしれない。

SE724では、他に箸状木製品11、曲物容器底板2、曲物底板1、板、棒の加工品などがある。曲物容器底板の1つは径20cm、厚さ0.7cmの柱目板で、木釘の跡が7カ所認められる。

(3) 曲物 SE740出土。残りは良いが土圧により変形する。底板は柱目で径14.6cmある。これに厚さ0.3cm、幅7.8cmの側板をまわし、底板をはめ込み、さらに下部に厚さ0.2cm、幅1.8cmの箍をまわし、その外側から木釘を7カ所に打って固定する。側板、箍はまげ込みの部分で穿孔し、板皮でとじ合わせる。側板は縦のならびに2カ所できつられ、穴は2個と7個ある。内面は垂直と斜め方向に刻み目がある。箍は縦のならびに3カ所、夫々1、2、1個



第19図 第36次発掘調査出土貨幣拓影(2/3)

の穴があり、1本の桜皮でとじられる。曲物の用途は食器の他に、杓や井戸杓などの日常生活用具として多方面にわたっている。

(4) 横樋 SE 740出土。横樋は布、ワラなどを打ってや

わらかくするための農具である。広葉樹が用いられている。打部の長さ12.8cm、中央で径5.4cm、柄部の長さ11.4cm、中央で径3.2cmある。加工されていない自然の枝を切断し、切断面は両小口の中央に向かって削り、柄部は縦方向の削りを行なって細くする。打部は木皮が一部残るところから未使用とも考えられる。

#### 貨幣 (第19図)

資料番号	銭種	出土地点	初鋳年代(年)
1	太平通宝	ピット	宋太宗(976)
2	紹聖元宝	黒橋土	宋哲宗(1094)
3	元豊通宝	ピット	宋神宗(1078)
4	宣和通宝	ピット	宋徽宗(1119)
5	元祐通宝	おち込み	宋哲宗(1086)
6	至和元宝	SX829	宋仁宗(1054~55)
7	嘉祐通宝	黒橋土	宋仁宗(1056)

第1表 第36次調査出土貨幣

#### 小 結

はじめにも記したごとく学校院東辺部においては昭和46年度に第9次調査を行い掘立柱建物1棟、井戸12基、南北溝5条などを検出している。今回の調査で検出した掘立柱建物は6棟であり、都合7棟が判明したことになる。今回検出した建物のうちSB690、SB705をのぞいては、いずれも発掘区外へのびており、その正確な規模をつかみえておらず、この点について

は今後の調査にまたなければならぬ。しかしながら今回発掘区中央部で検出したSB700、SB705、SB710の3棟については柱穴の切り合い関係があり、それぞれの建物が時期を異にしている。順序としてはSB700、SB710、SB705の時期的関係が考えられる。この点から、この学校院東辺部においても建物の建て替えのあったことが確認されたことになる。

次にこれらの建物の具体的な時期が問題となるが、その手がかりとしてSB700の柱掘方から検出した第10図の長頸壺と若干の須恵器、土師器がある。しかしながら、これらはすべて小さな破片であり、これらの遺物から建物の時期等について考察するにはかなりの危険性をともなうことは否定できない。

まずSB700については長頸壺を重視するならば、ほぼ奈良時代の後半頃が考えられるのである。次にSB705は、柱掘方から土師器の坏と典型的な黒色土器を検出しており、平安時代前半、それも9世紀代頃が考えられる。したがってSB710については柱穴の切り合い関係からその中間に入ることになる。次に各建物の共存関係についてはSB710とSB715はほとんど振れもなく、東西方向の柱筋がほぼ通っているところから同時存在の可能性が考えられるが、その他については不明である。

以上述べたようにこの地域にはかなりの数の建物が存在することが明らかとなったわけであるが、現在の段階では発掘面積も少なく、これらの建物の性格、まとも等については今後の調査の進展に待つはかない。しかしながらこの地域の地形的な観察からすると、この地域が官衙としての1ブロックをなす可能性は考えられるのである。

次に今回検出した顕著な遺構として井戸がある。今回15基を検出したが、第9次調査で検出したものを含めると合計27基になる。勿論これらすべてが同時期に存在したわけではなく、鎌倉時代を中心として平安時代後半から室町時代におよんでいる。これらの井戸の存在は、この地域が生活の場であったことを証明しているものであろう。まだ学校院の裏体については不明な点は多いが、おそらくこの井戸も、この問題とは無関係ではなかろう。今後これらの中世の遺構についても十分な調査が必要であると思われる。

註1 亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」『九州歴史資料館研究論集I』(1975)

註2 中山平次郎「古瓦類雑考」『考古学雑誌6-4~7-4』(1915.12~1916.12)

註3 塩屋勝利・折尾学編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書32』(1975)

註4 奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告IV」『奈良国立文化財研究所学報第17冊』(1965)

奈良国立文化財研究所編「平城宮発掘調査報告VI」『奈良国立文化財研究所学報第22冊』(1974)

註5 京都市文化観光局文化財保護課編「史跡西安寺跡、鳥羽庭宮跡」『京都市埋蔵文化財年次報告1973-II』

註6 奈良県教育委員会編「藤原宮」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊』(1969)

註7 前掲書(註1)



### 3 第37次調査

第37次調査地はさきにも述べたごとく学校院跡を方2町とした場合、ほぼその中央にあたる位置にあり、また学校院に関する遺構はまったくわかっておらず早急な調査が要望されていた所である。しかしながら土地の公有化がおくれていたため、これまで発掘調査が実現しなかった。昭和49年度土地の公有化がなされたため昭和50年度の当初の事業として調査を行うこととした。地番は大字観世音寺字学業院 222 番地である。調査は第36次調査の終了を待って昭和50年6月7日から開始し7月26日に終了した。

#### 検出遺構

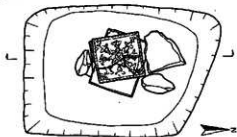
この調査で検出した主な遺構は掘立柱建物4棟、柵1条、井戸2基などである。

以下これらの主な遺構についてのべる。

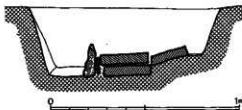
#### 掘立柱建物

**SB 760** 建物の大半が発掘区外の道路・民家の下になっているため規模の確認はできなかったが1間以上×5間以上でおそらく東西棟建物であろう。柱間寸法は桁行・梁行とも2.1m(7尺)である。

**SB 765** 発掘区東南部で検出したもので3間以上×5間以上の東西棟建物である。北に廂がつくが、南側は民家の下になるため確認できないがおそらく南・北廂つきの建物であろう。柱間寸法は梁行・桁行とも2.1m(7尺)、廂も同様2.1m(7尺)である。柱掘方は1m前後の隅丸方形であるが不揃いである。柱穴の一部に文様塼を二枚重ねておき礎板として使用しているものがある。また西妻の柱穴がSB760によって切られており、SB760よりも先行する建物である。

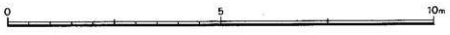
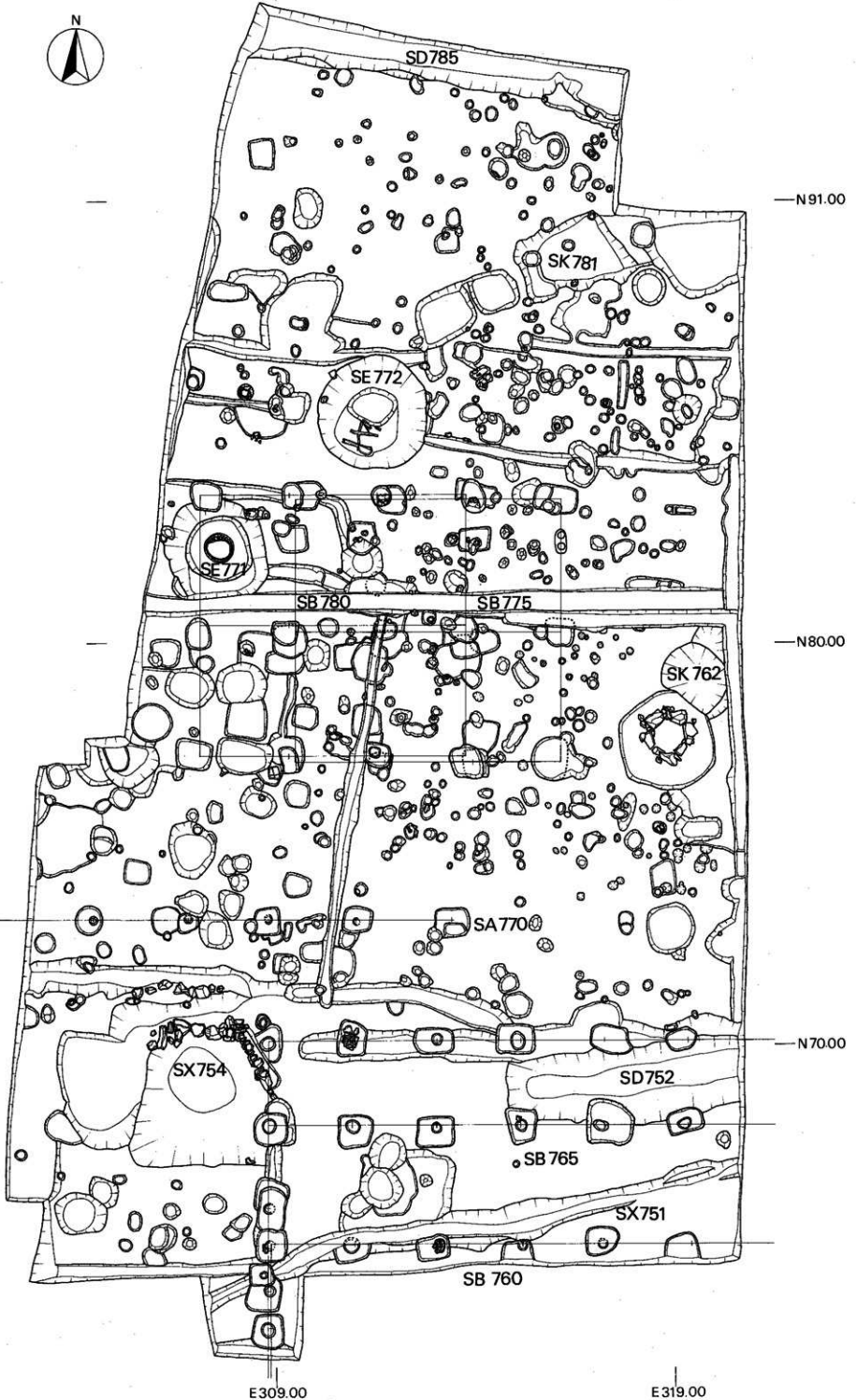


**SB 775** 発掘区中央部で、まったく規模を同じくする2棟の建物を検出した。2間×3間で総柱の東西棟建物である。SB780との間に柱穴の切り合いがみられる。柱間寸法は桁行2.1m(7尺)、梁行3.3m(11尺)である。



**SB780** SB775と同様2間×3間で総柱の東西棟建物である。柱掘方は80cm前後の大きさであるがきわめて不揃いである。柱間

第21図 SB765柱穴実測図



寸法は桁行2.1m(7尺)、梁行3.3m(11尺)である。

#### 櫓

**SA770** SB775・SB780とSB760・SB765の中間で東西方向にのびる櫓4間分を検出した。これはさらに西方へのびている。柱間寸法は8尺等間である。柱掘方一辺が60cm前後の方形である。

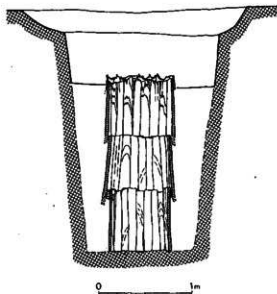
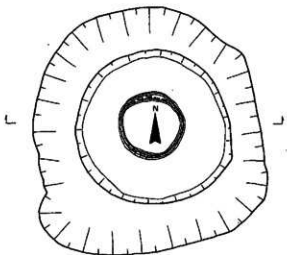
#### 井戸

**SE771** SB780の柱穴を切って構築された円形の井戸である。掘方は2.4×2.5mの不整形形で、深さは約2.6mである。桝は直径70cm内外、深さ70cm程度の桶椀の桝が4段分残っている。最上段のものは桝の下端部がわずかに残っているのみである。最下段と二段目の桝が重なる部分には石・瓦をつめている。

**SE772** 掘方は2.8×2.6mの円形で、深さは約1.3mで比較的浅い。桝はほとんど消失しているが底に若干の板材が残っており、これから復原すると一辺70cmの縦板を使用した方形桝と考えられる。

#### その他の遺構

**SX754** SB765の柱穴を切って構築された石組み遺構。北と東側に「く」字形に組まれており、その内側は若干くぼんでいる。石は40×25cm程度の花崗岩を据えその上にやや小さな石を組んでいる。北側の石組みからさらに1mほどはなれたところに、これと平行して石列が少量残っている。庭園遺構の一部かとも考えられる。



第22図 SE771実測図

## 出土遺物

今回の調査で出土した主な遺物は土器・瓦埴類である。出土量は比較的少ない。瓦埴類はわずかであるが、文様埴の出土が目立っている。とくに掘立柱の礎板として使用されていた完形の文様埴は注目される。

### 土器

主として井戸および土壌から出土した。器種として土師器・須恵器・黒色土器・瓦器それに陶磁器などがある。

井戸 (SE772) 出土土器 (第23図 138~156、図版28)

土師器・瓦器・磁器がある。埋土の状況から上層 (黒灰色土) と下層 (青灰色および黒灰色の粘質土) に分けられる。

土師器 (138)~(145) は小皿で、口径 8.8~9.8 cm、器高は 1.0~1.5 cm のものである。すべて底部の切り離しはヘラ切りで、簾状圧痕を有する。

(146)~(151) は坏で、口径 13.6~17.6 cm、器高 3.0~3.5 cm である。底部から体部にかけて円味をもち、円弧状を呈する。口縁部はやや肥厚し、端部は円くおさめる。また内面はヘラ状のものでミガかれており滑らかである。胎土は精製され、おおむね淡茶灰色を呈する硬質の土器である。(146) はやや小形のものである。(148)~(150) は体部下位にわずかであるが稜をもち、内面にはヘラ状の当りがある。(147) を除いて他は下層出土である。

瓦器 (152)~(154) は瓦器の埴である。(152) は下層、(153) (154) は上層出土である。いずれも破片で全形は知り得ない。(152) の復原口径は 16.4 cm で、手法については明確でないが、体部内面は粗いヨコ方向のミガキで、外面は丁寧なヨコ方向のミガキを行っている。内面は黒色で外面は口縁部の一部を除き灰白色を呈する。(153) の内面はミガキを行っているが明瞭でない。外面は高台部付近まで粗雑であるがミガキを施行している。内面灰白色、外面は銀白色を呈する。(154) も (153) と同様であるが、内面は黒色を呈する。

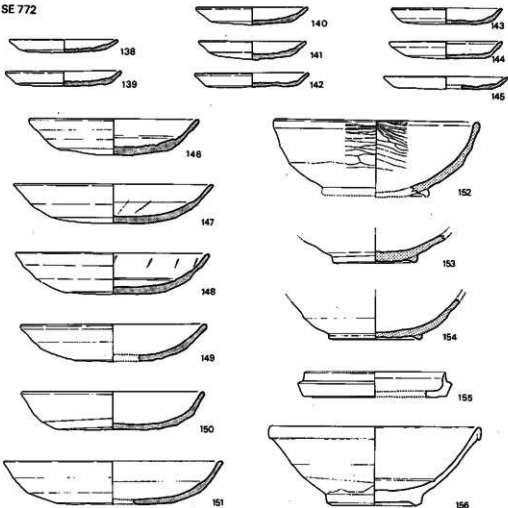
磁器 (155) は青白磁の合子で、身の部分と思われる。復原口径 11.0 cm、器高 2.0 cm をはかるが、小片であるためやや疑問がある。外面蓋受け部分を除いて、淡緑青色の釉がかかっている。埋土上層から出土している。(156) は白磁の碗で 3 分 1 残存している。口径 17.0 cm、器高 6.4 cm で、口縁部は玉縁で、高台の削り出しは浅い。釉色は灰白色を呈するが、外体部下半には施釉されていない。

井戸 (SE 771) 出土土器 (第23図 157・158、図版28)

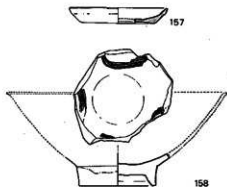
出土量はわずかで、大部分は小片である。

土師器 (157) は小皿で、復原口径 7.8 cm、器高 1.1 cm をはかる。底部の切り離しは糸切りである。この他に小皿と坏の小片があるが、すべて糸切りである。

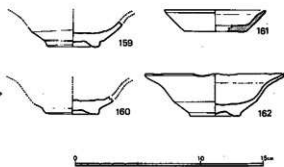
SE 772



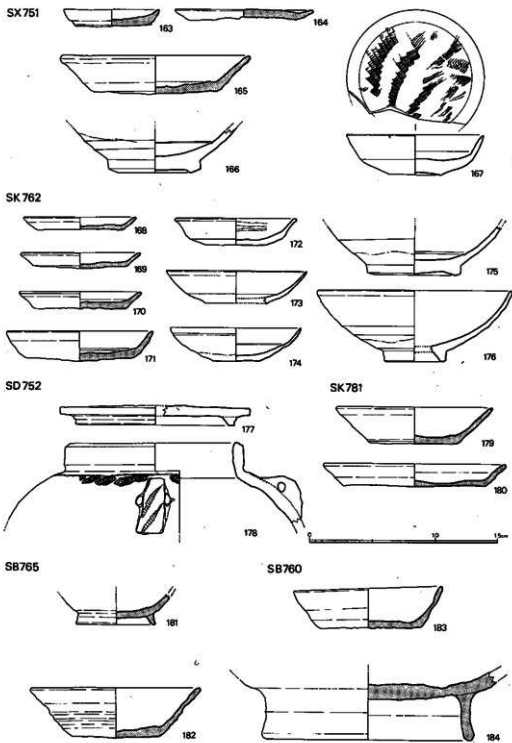
SE 771



SX754



第23图 SE771, SE772, SX754出土土器实测图



第24图 SB765, SB760, SK762, SK781, SD752, SX751出土土器实测图

磁器 (158) は白磁の碗の底部である。これは桶椽井戸枠の重なった部分の間隙に瓦や小石とともに詰めてあったものである。胎土は純白に近く、灰白色の釉がうすく施釉されている。高台部にはかかっていない。内底には柳摺文がある。

石組遺構 (SX 754) 出土土器 (第 23 図 161・162)

遺物はほとんどなく、陶磁器片が数点出土しただけである。

陶磁器 (161) は白磁の皿で、口縁端部に釉のかからない、いわゆる口ヘゲのものである。復原口径 8.0 cm、器高 1.7 cm であり、釉色は青味のある白色を呈する。(162) は陶器で、2 分 1 残存している。復原口径 11.0 cm、器高 3.4 cm で削り出しの浅い高台で、器内のうすい体部から口縁部は「く」の字状に外反している。口縁端には輪花があり、4カ所認められる。胎土は砂粒の混入が目立つ粗いもので、暗灰色を呈する。釉は汚れた暗緑灰色を呈し、曇付を除いて全面に施釉されている。また内底と曇付に重ね焼きの目跡がある。朝鮮産のものであろうか。(159) (160) は擾乱土出土のものであるが、同種のものとして掲げた。

落ち込み (SX 751) 出土土器 (第 24 図 163~167、図版 28)

発掘区の南端の溝状を呈する浅い落ち込みで S B 760 の柱穴は、この埋土を除去し検出した。出土量は少ない。

土師器 (163) (164) は小皿で、(163) は口径 7.6 cm、器高 1.3 cm。(164) は歪みがあり、口径 11.0 cm、器高 9.0 cm。ともに糸切り離しで、簾状圧痕を有する。(165) は坏で、復原口径 15.0 cm、器高 3.2 cm である。糸切り離しで、やや赤味のある淡茶色を呈する。

磁器 (166) は白磁の碗で (156) と同じもので、内底に沈線がある。(167) は青磁 (竜泉窯系) の皿で完形に近い。口径 11.0 cm、器高 3.3 cm で浅い無高台の器形である。底部はヘラ削りのあげ底で体部中位にはわずかに稜がある。釉は厚目で灰色気味の淡緑色を呈する。底部には施釉されていない。また内底には櫛目の波状文様がある。

土埴 (SK 762) 出土土器 (第 24 図 168~176、図版 29)

発掘区の東端で新期の井戸の北側で検出した摺鉢状を呈する土埴である。

土師器 (168)~(170) は小皿で口径 9.0~9.8 cm、器高 1.0~1.4 cm である。(168) (169) は糸切り、(170) はヘラによる切り離しである。(171) は小形の坏で、口径 11.8 cm、器高 2.4 cm であり、ヘラ切り離しである。これらは精製され、硬質のもので、おおむね淡茶白色を呈する。

瓦器 (172) は皿で復原口径 9.8 cm、器高 2.1 cm である。硬質のもので体部内外面は銀白色、底部は灰色を呈する。ミガキは、内面ではヨコ方向、外面では口縁部付近に一部みられる。

磁器 (173) (174) は黄白色の釉がかかった皿である。復原口径 10.4~11.4 cm、器高 2.6 cm で、器内がうすく、体部はやや内彎気味に大きく開く。ともに内面に段があり、(173) は体部下位に、(174) は体部中位にそれがある。外底部には施釉されていない。(175) は白磁の

碗で前述の(166)と同じものである。(176)も同じく白磁の碗で黄色味を帯びた乳白色の釉がかかっている。1/2残存し、復原口径15.6cm、器高5.7cmである。削り出し高台で、口縁端部は玉縁状を呈する。高台部には施釉されていない。

落ち込み(SD 752)出土土器(第24図177・178、図版29)

SB765を切りこむ溝状になる落ち込みで、埋土は黒灰色である。出土量は少ない。

土師質土器(177)は胎土に砂粒を含む土師質のものである。小片であり、円盤に高台を付けている。用途は不明である。(178)も前者同様、茶褐色を呈する。小片であるが土釜と思われる。肩部に耳が1個残っており、縄目状の文様がある。また頸部取り付けの部分には六角形のスタンプがある。

土壙(SK 781)出土土器(第24図179・180)

方形の浅い土壙で、出土の土器は土師器と須恵器である。

土師器(179)は復原口径12.4cm、器高3.0cmで、比較的精製されている。ヘラ切り離しで淡茶灰色を呈する。(180)は復原口径14.6cm、器高1.8cmで手法、色調も前者と同じである。

掘立柱建物(SB 765)柱穴出土土器(第24図181・182、図版29)

柱穴出土土器はきわめて少なく、形状を知れるものはわずかである。

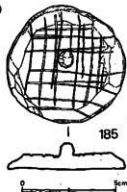
黒色土器(181)は内外面黒色を呈し、両面にヘラミガキを施行している。全形は不明であるが小型の壺であろう。

土師器(182)は深めの坏で、壺の礎板をもつ柱穴から出土した。口径13.6cm、器高4.0cm、底径7.0cmのもので体部は直線的に外上方にのび端部はやや肥厚し円味をもち、底部はヘラ切り離し跡が認められる。胎土は精製され、やや灰色気味の茶白色を呈する。

掘立柱建物(SB 760)柱穴出土土器(第24図183・184、図版29)

同じ柱穴から出土したものである。

土師器(183)はほぼ完形に近く口径12.0cm、器高3.2cm、底径7.0cmである。胎土は精製され淡茶灰色を呈し部分的に黒灰色を呈する。体部はやや内彎気味で中位が強いヨコナデのため内側へ屈曲した感じである。口縁部は肥厚し端部は円味をもつ。底部はヘラ切り離しで幅広い簾状圧痕を有する。(184)は高台の高い大型の壺と思われ、胎土は砂粒を含み調整も粗雑である。淡茶褐色を呈する。



特殊遺物(第25図、図版29)

第25図 第37次発掘調査出土鏡状土製品

(185)は直径6.0cm、厚さ0.8cmの円盤の中心に鈕状の突起を付けた鏡状の土製品である。下面はほぼ平らで全面に擦痕がみ



られる。上面および側面はケズリによって整形しており、乱雑な格子文を刻んでいる。焼成は硬く淡茶灰色を呈する。床土からの出土である。

瓦埴類  
(第26～29図、  
図版33・34)

学校院跡における瓦埴類の出土率は、政府跡に比して極めて少量である。今次調査で出土した主な瓦埴類は軒丸瓦9個、軒平瓦7個、文字瓦34個と文様埴、瓦破片である。  
軒瓦・平瓦、文

字瓦の大部分は新期盛土ないし攪乱土中などから出土したものである。

第36次調査で出土した文様埴はこれまでにない出土率であったが、今回の調査で、それをさらに上回る計24個体が出土した。それらは土壙、柱穴、土器溜りなどから発見され、宝相華文様埴5個、唐花文様埴17個とSE771から出土した三角埴2個である。特にSB765(第20・21図)の柱穴からは下方に唐花文様埴、上方に宝相華文様埴が重った状態で検出し、柱の礎板として転用されたものと思われる。唐花文様埴は保存がよく、文様も鮮明に残りこれまでになく逸品といえよう。新羅(慶州附近)で発見される文様埴に対し簡素で雄大な感覚をみることが出来る。本来文様埴は須弥壇ないし壁などに使用されるものであり、大宰府出土例の中で第二次的な用途としては第30次調査で階段に転用したものに次いで2例目である。



第26図 SB765柱穴出土文様埴拓影



第27図 SB765柱穴出土土様埴拓影

第28図は軒丸瓦を硯に転用したもので、SE772付近の落ち込み部から出土した。珠文と凸鋸齒文さらに胎土、焼成などから老司系瓦と思われる。胎土には砂粒が少く灰色を呈し堅緻で硯陸部は磨滅している。参考例として第29図は現在太宰府町役場に保管されているもので、太宰府町大字国分から発見されたものである。前者に比して珠文がなく、中央はやや高くなっており、全体的に丁寧な調整が施されている。この瓦も老司系のものであろう。

#### 小 結

今回の調査で検出した掘立柱建物は4棟であるが、特に発掘区両側で検出したSB765は扉付の建物であり、またSB760はその大半が発掘区外であるが柱穴の状況から見てSB765の建て替えである可能性も考えられる。

SB765は東西に5間分を検出したがさらに東へのびていることは確実である。仮りにこの建物の桁行を7間とした場合、その中心は政庁中軸線から約322mではば3町である。

このことはこれまでの推定の学校院跡を方2町とした場合、この建物はその中心に一致することになる。この建物が学校院に関係するものであるという確証はないが注目すべき点であら



0 5cm

第28図 第37次調査出土硯



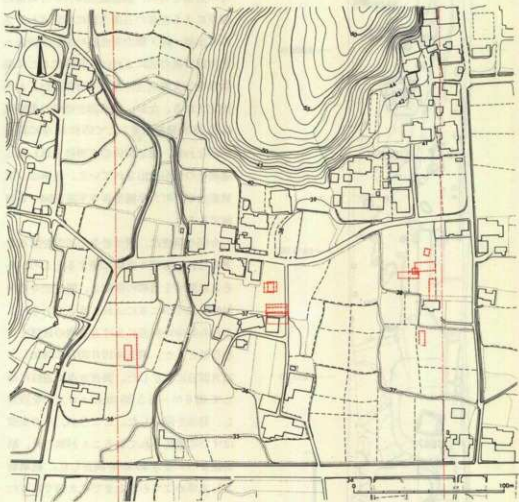
0 5cm

第29図 大宰府町大字国分出土硯

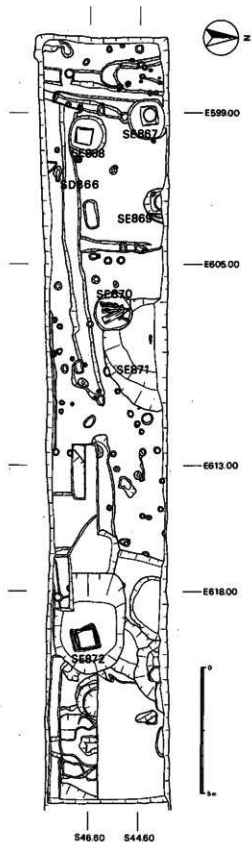
う。次にこの建物の時期についてであるが、柱掘方に文様埴を重ねて礎板状に敷いたものがあり、また柱穴埋土から埴形の黒色土器や土師器の坏が出土しており、これらの遺物からみて、ほぼ平安時代前半頃の時期が考えられる。

以上今回の調査結果について述べたが、いずれにしてもこの地域も発掘面積は僅少であり、建物の性格等についての問題の考察は今後の調査の進展に待つところが多い。

註1 九州歴史資料館「大宰府史跡第30、31、32次発掘調査概報」1974.8



第30図 学校院跡検出遺構配置図



#### 4 第39-1次調査

第39-1次発掘調査は観世音寺の南、県道山家一関屋線に接した南側部分について行なった。この調査は県道同線の拡幅工事に伴う事前調査で、現在町営の観世音寺駐車場として活用されている県有地279m<sup>2</sup>をその対象とした。調査地点は大宰府の条坊復原による左郭の五条六坊に推定され、さらに加藤一純・鷹取周成編の筑前国統風土記付録所載の図によれば江戸時代ここに観世音寺公文所別当の屋敷の所在したことが推定される。なお、当該調査地点の東隣地は第28次発掘調査として昭和48年に調査が行なわれ、構造関係の工房跡と思われる遺構その他が検出されている。地番は、筑紫郡太宰府町大字観世音寺字露切98-8番地である。

今回の調査は、観世音寺の前面に限ると考えられる推定5条線に接するところからそれに関する遺構の確認と、観世音寺の中軸線をわずかに東にふれる地点であるところから同寺の前面における遺構の確認を主な目的とした。調査は10月20日に開始し、11月27日に終了した。調査地点に道路に沿って幅5m×長さ35mのトレンチを設定し、発掘を開始した。ところが、その東側はすでに攪乱されていることが知られ、結局幅5m×長さ30mを調査した。駐車場として埋め立てられるまでは水田であったため、旧水田の表土・床土を除去したところ、遺構面に達した。10月24日からは表土・床土の除去と併行して遺構の検出に着

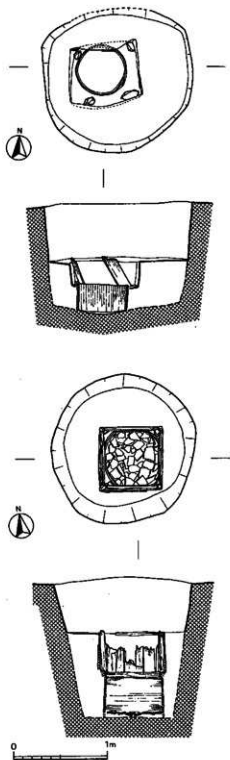
手し、11月4日には確認のほとんどを終えた。11月8日から実測および下層遺構の確認、補足調査を行ない、27日に終了した。調査の結果、小溝・井戸6基などを検出したが、小範囲の発掘調査のため当初の目的に関する遺構の検出はなかった。

#### 検出遺構

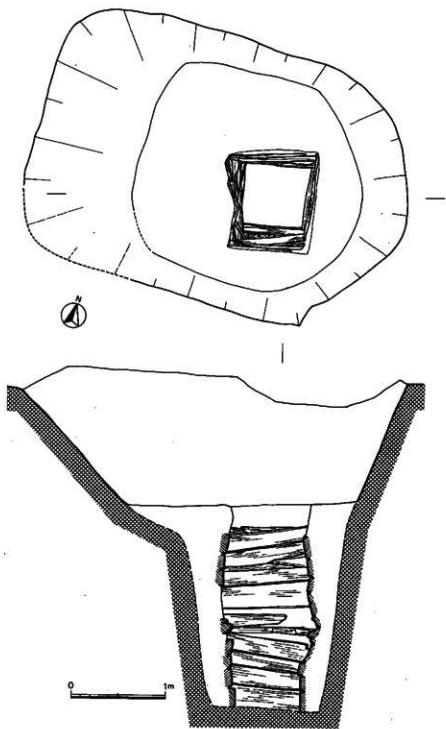
発掘区の中央より西側は床土の直下に地山が検出されたため、遺構面は一層のみであった。しかし東側では地山が斜方面に降り、その埋土の状況によって上下二層の遺構が確認された。すなわち上層の検出遺構は井戸5基、土壇6、東西溝2、南北溝3、性格不明の小ピット多数を数えた。これに対し、下層の検出遺構は発掘面積が発掘区の約1/4であったため少なく、井戸1基、井戸様のピット2にとどまった。なお、地山は下層遺構のさらに下部にあるが、一部を試掘したところ分厚い砂層の下に黒色粘土層が続いている。これらは北東-南西方面をとると思われ、川などの水の流れがここにあったと考えられる。

#### 溝

SD 866 溝は上層で東西溝2、南北溝3が検出されたが、いずれもその残存状態は良くなく、本来の規模・時期・性格・相互の関連をとらえることはできなかった。SD 866 はもっとも残存状態が良かったが、それにしても幅 35 cm 前後、深さ 10cm 程度であった。SD 866 の約 2 m 南側に同方向に流れる東西溝が存在し、あたかも通路の両側を流れる小溝の感を与えたが、堆積土や遺構相互の切合い関係からみて無関係であろう。南北溝の1本は切合い等から



第32図 SE867(上)SE868(下)実測図



第33图 SE.872英测图

みてSD 866 と一連の関係を考えられるが、それ以上は明らかにできない。

#### 井戸

**SE 867** 径 160 cm ほどの円形掘方の井戸で、上端より約 60 cm の深さに井戸枠が設けられている。井戸枠は一辺約 60 cm の方形プランを呈し、その各辺には、幅 10~15cm の薄板を縦方向に並べていたが、その大部分はすでに崩壊していた。方形枠の内側には径約 50 cm の曲物が一段置かれていた。井戸枠の上端から底までの深さは 60 cm ほどしかなく、極めて浅くつくられた井戸である。

**SE 868** 掘方は径 150 cm ほどの円形プランをとるが、やや角張っており、割張りの強い隅丸方形に近い。井戸枠は、掘り方の上端から約 50 cm の深さで、やや南寄りにつくられている。方形枠で、その保存状態はよいが、その上部に頭大~拳大の石や瓦などが乱積されていた。方形枠は、四隅に角柱を立て、角柱の間に上下二段に横棧でとめている。横棧の外側に幅 8~20 cm、厚さ 3 cm ほどの板材を縦方向に並べている。下段の横棧に接して径 62 cm で下にやや広がる曲物が一段置かれている。曲物の底には幾重にも瓦片が丁寧に敷き詰められている。SE 867 同様、井戸枠の上端から底まで深さ約 90 cm の浅い井戸である。

**SE 870** 井戸内部の板材がすでに北方に倒壊し原状をとどめていなかった。掘方は上端では径 160 cm ほどの円形プランを呈するが、底部では幅 130 cm ほどの隅丸方形プランとなる。深さ約 185 cm。板材は西側の残りがよく、南・東側は内側に倒壊していた。西側板材はほぼ一直線に並んでおり、また棧と思われる横木も内側にみられる。これらから、本来は一辺に数枚の板材を縦に使用して枠とした一段組みの方形プランの井戸と思われる。内部からは主に土師器が出土し、また曲物の底と思われる長円形の板材や足駄なども出土している。井戸 SE 871 を切っている。

**SE 872** 掘方は長軸約 400 cm、短軸約 300 cm、井戸枠までの深さ約 140 cm の長円形プランを呈し、広さ・深さともに大規模につくられている。この掘り方は下層で確認された。きわめて残存状態の良い井戸枠が掘り方の東側に片寄ってつくられていた。枠は幅 15~25 cm、厚さ 10 cm 前後の堅牢な板材を横組みにした方形プランを呈している。最上段の板材がすでに失われ、また土圧などでやや歪みがみられるが、本来は 11 段からなっていたと思われる。それぞれの板材の端部は凹凸につくられ、それぞれ組み合わされており、その組み合わせは一段ごとに変えられている。たとえば北面の板材では一段目の東端は凹、二段目は凸、三段目は凹、となっている。また板材は二重になっており、内側の板材間の空隙を埋めるように外側はややズラして組まれている。この場合、内側とではやはり組み合わせが変えられている。井戸枠の上端から底まで約 220 cm、掘方からでは約 360 cm の深さをはかる。井戸の掘方、井戸枠ともに群を抜いた規模と堅牢さをもつ井戸の例であり、同時に数少ない横組み枠の例である。なお上層遺構に、井戸枠の直上に性格不明の径 50 cm ほどのピットがあり、その下底は井

戸枠の最上段上端の約30cmほどの部分にあった。この底部はさらに掘りうる可能性があったところから、SE 872と関連すると思われるが、確認できなかった。

井戸は以上の4基のほかSE 869、871を確認した。いずれもその半分がトレンチにかかっており完掘できなかった。SE 869は径130cmほどのほぼ円形の掘方が検出され、中に板材の残存がみられたが、発掘部分の所見のみでは、そのプランなどを推定することはできなかった。SE 871はSE 870に先行し、その掘方の規模がSE 872を上回っているが、肝腎の井戸桶の大部分はトレンチ外にある。わずかに確認された板材からみて桶側様の枠のものであろう。その他にも井戸状の掘り込みがみられたが、その性格を判断することはできなかった。

## 出土遺物

出土遺物は土器・瓦葺類が主で、他に木製品・滑石製品などが出土している。遺物の出土量は比較的少ない。土器は土師器・黒色土器・瓦器・緑粘陶器・越州窯青磁・青磁・白磁などが全域から出土している。平安期に属するものが多い。遺構にともなわぬ遺物もあるが好例が数少ないため、以下では各遺構出土の遺物のみをみておきたい。

### 溝(SD 866)出土土器(第34図、図版30)

土師器・越州窯青磁などの土器や瓦類が主として溝の東半部で出土している。

土師器(186)~(188)は小皿で、わずかに砂粒を含む胎土をやや軟〜硬質に焼成している。内底部はナデ、体部はヨコナデに調整されており、いずれもへら切り離しの底部である。(187)(188)には簾状圧痕が認められる。淡褐色を呈する例が多い。(186)は口径9.0cm、深さ0.2cmをはかり、平板で分厚くつくられた底部にわずかにつまみ上げられた口縁がつく。(187)(188)は口径9.0、8.4cm、深さ0.7、0.8cmをはかる。底部から直線的につまみ上げられた体部をもち、口縁端は円味をもっている。

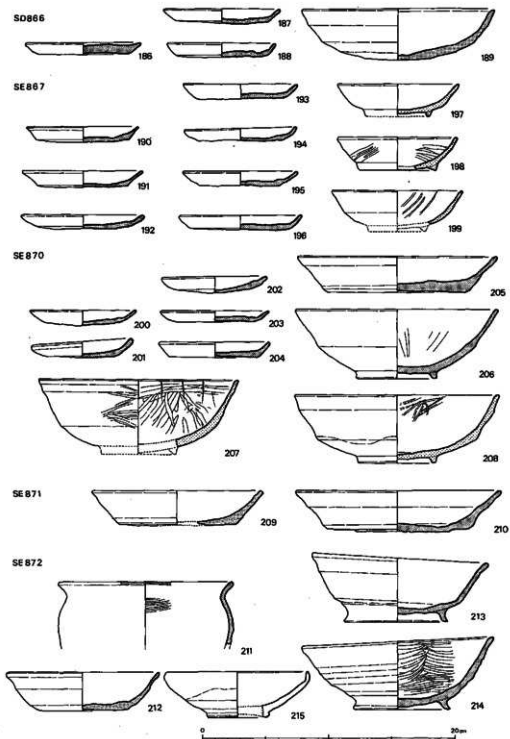
(189)は坏で、口径15.0cm、深さ3.7cm。体部は強く内彎し、そのため底部から口縁部にかけて半円をなす。口縁端は円くおさまられている。胎土には少量の砂粒を含む。やや軟質に焼成され、乳白色を呈する。内面の調整は磨滅のため明らかでないがへらミガキされているようであり、内底部にナデ調整の痕跡が残るところからナデの後にミガキを加えたのであろう。体部外面の上位はヨコナデされているが、下位については明らかでない。底部はへら切り離しされている。

### 井戸(SE 867)出土土器(第34図、図版30)

SE 867からは土師器・瓦器・須恵器・越州窯青磁・瓦などが出土しているが、土師器・瓦器を除いて小片である。

土師器(190)~(196)は小皿で、微砂を含んだ胎土からなる器壁は、内底部をナデ、体部をヨコナデで調整されている。淡黄灰色を呈する例が多い。(190)~(192)は1/2~1/3程度の





第34图 SD866, SE867, SE870, SE871, SE872出土土器实测图

破片で、ヘラ切り離された底部をもつ。井戸の内部からの出土。口径8.8~9.5cm、深さ0.8~1.0cm。(190)(191)は口縁部がややうす手につくられ、口縁端にむかって外反気味につまみ上げられている。(192)は体部から口縁部にかけてほぼ同じ厚味につくられ、内彎気味につまみ上げられた口縁端は円味をもっている。(191)には簾状圧痕がみられる。(193)~(196)は底部を糸切り離され、(195)を除いて簾状圧痕がみられる。いずれも井戸埋土からの出土で、完形ないしはそれに近い。口径8.6~9.4cm、深さ0.7~0.8cm。体部から口縁部にかけてやや内彎気味につくられ、口縁端は円味をもっている。

瓦器 (197)~(199)は高台付碗で、井戸埋土から4個体分の破片が出土している。(197)(198)は約1/2残存している。口径9.5cm、器高2.7cmほどに復原される小碗である。砂粒を含まないよう精選された胎土を硬質に焼成している。銀白色を呈するが、大部分は風化し黒色~黒灰色となっている。内彎気味につまみ上げられた体部は内外面ともにいねいにヨコナデされ、その上をヘラミガキされている。断面三角形に近い高台を有する。(199)は口径10.3cmをはかり、他にくらべやや大きい。調整は他と同様であるが、内彎気味につまみ上げられた体部は口縁端でやや外方に広がっている。

#### 井戸 (SE 870) 出土土器 (第34図、図版30)

土師器・瓦器・青磁・白磁などが出土している。(202)(203)は井戸桶の裏込め土中から出土したが、他は埋土中からの出土である。

土師器 (200)~(204)は小皿で、(200)~(203)の底部はヘラ切り離されている。口径7.9~8.4cm、深さ0.9~1.0cmをはかるが、(203)は0.5cmと浅い。(200)は厚味をもつてつくられた底部からやや内彎気味の体部がつまみ上げられている。口縁端は円味をもつ。

(201)は底部から体部が直線的にうすくつまみ上げられ、その口縁端は明瞭な稜をもつ。

(203)は平板につくられた底部とやや内彎気味の体部とからなる。(204)の底部は糸切り離されている。口径8.5cm、深さ0.7cm。(200)~(204)は器壁にわずかに砂粒を含む胎土をもちいている。器壁の調整は内底部をナデ、体部をヨコナデしている。(202)(203)には簾状圧痕がみられる。淡茶褐色~灰褐色を呈する。

(205)は坏で、口径15.7cm、深さ2.3cm。平板につくられた底部はヘラ切り離され、簾状圧痕がみられる。やや外反気味に立ち上がる体部は外方に大きく広がる。内底部はナデ、体部はヨコナデ調整されている。砂粒をほとんど含まない胎土をもちいて、かなり硬質に焼成されている。淡赤黄色を呈する。

(206)は高台付碗で、乳白色を呈し、精選された胎土が硬質に焼成されている。底部から内彎しつつ立ち上がる体部は口縁に近くにつれ直線的となる。底部にはやや外に広がる低い高台を有する。内底部・体部の調整は明瞭でないが、内面に放射状の沈線様の線がみられるところからヘラミガキされたものであろう。外底部から高台にかけてはヨコナデされている。口径

15.8 cm、器高 5.7 cm に復原される。

瓦器 (207)(208) は高台付塊で、(207) は体部の約 1/5 が残存する瓦器塊片である。体部は内彎しつつ立ち上がるが、口縁端でわずかに外方に反転する気配をみせる。体部の中位にみられる稜がことに目立つ。底部にはおそらく断面三角形の低い高台が付されるのであろう。体部は内外面ともにヨコナデされ、さらに粗い幅広のヘラによってミガキが施されている。内面にはヘラミガキの際のヘラの当たりが放射状に認められる。内面は漆黒色を呈する。外面は口縁部付近は黒色であるが下位にいくに従って汚れた感じの灰白色となる。わずかに砂粒を混じえた胎土を硬質に焼成している。口径 15.7 cm、器高 6.0 cm 程度に復原される。(208) は約 1/3 が残存している。体部は底部から内彎しつつ立ち上がり、口縁端を円くおさめている。体部外面の中ほどに明瞭な稜がまわり、それより下位はヘラ切りされている。底部には断面三角形に近い高台が低くつけられている。内面は銀白色を呈し粗くヘラミガキされているが、器壁は滑らかである。外面はおおよそ稜の上位はヨコナデの後に粗くヘラミガキされ、下位はヘラ切りの後にヨコナデ調整が施されている。精選された胎土を堅緻に焼成している。口径 16.0 cm、器高 5.6 cm に復原される。

#### 井戸 (SE 871) 出土土器 (第 34 図、図版 30)

SE 871 は広い規模の掘方をもち、その約半分を発掘したが、遺物の出土量は少ない。土師器・青磁・白磁・瓦などが掘り方埋土から出土しているが、いずれも小片である。

土師器 (209) (210) は坏で、(209) は約 1/5 ほどの破片で、口径 13.2 cm、深さ 2.8 cm ほどに復原される。底部と体部の接合部がかなり分厚くつくられている。体部は直線的に立ち上がるが、内面をわずかに削りこんでいるため内彎気味の印象をうける。内底部はナデ、体部はヨコナデ調整されている。体部内面はヘラミガキされているようにも思われるが明瞭でない。外底部は糸切り離しされていると思われる。精選された胎土を硬質に焼成している。淡黄白色を呈する。(210) は約 1/2 ほど残存しており、もっとも残りの良い破片である。口径 16.3 cm、深さ 2.6 cm。体部は外反気味に立ち上がり、大きく外方に広がる。口縁端は (209) 同様に円くおさめられている。外底部がヘラ切り離しされ、簾状圧痕を残すほかは、(209) と同様の調整が施されている。なお内底部にススが付着している。少量の砂粒を含む胎土を硬質に焼成している。淡赤黄色を呈する。

#### 井戸 (SE 872) 出土土器 (第 34 図、図版 30)

SE 871 同様に広い掘方をもつ井戸であるにもかかわらず、遺物の出土量はきわめて少ない。ことに井戸枠の中からは完形の黒色土器 1 点を除けば破片もほとんど出土していない。井戸枠直上のピットは SE 872 と一連のものである可能性があり、可能性の有無にかかわらず SE 872 の埋没後の時期を示すことはその位置から疑いなく、あわせて考えておきたい。ここからは土師器・青磁・越州窯青磁などが出土している。

土師器 (211) は甕で、口径 13.7cm ほどに復原される小形の甕の破片。精選された胎土を硬質に焼成している。口縁部および体部外面はヨコナデ調整され、体部の中ほどに凹帯がみられる。内面はヘラミガキされている。外面は淡い赤褐色、内面は灰色を呈する。

(212) は坏で、約 1/3 残存し、口径 12.0 cm、深さ 2.6 cm に復原される。わずかに上げ底気味となる底部はヘラで切り離されている。体部はわずかに内彎気味に立ち上がり、口縁端近くでやや外反する。全体に円味をもった坏である。内底部はナデ、体部はヨコナデ調整されている。精選された胎土をもちいているが、焼成はやや軟質である。暗い色調の乳白色を呈する。

(213) は高台付埴で、焼きひずみのためか器形にゆがみがあり、口径・器高ともに一定しないが、実測部で口径 13.8 cm、器高 5.1 cm をはかる完形の埴である。やや内彎気味に立ち上がる体部は、中位から口縁部にかけて外反する。口縁端は円くおさまられている。体部の下位に明瞭な稜を有する。器壁は全体にうすつくられ、しっかりとした高台を付けている。高台は高くつくられ、外方に広がる。砂粒をあまり含まない胎土を硬質に焼成している。淡茶色を呈し、調整は比較的いいに施されている。内底部・体部はヨコナデされ、内底部にはさらにその後のナデ調整がみられる。外底部はヘラケズリされているが、未調整。簾状圧痕を残す。高台はヨコナデ調整されている。

黒色土器 (214) は内黒の黒色土器の高台付埴で、ほぼ完形。井戸中から出土している。(213) 同様ゆがみがあるが、口径 15.3 cm、器高 5.4 cm ほどのものである。器高に比較して内彎気味に深くつくられた体部は、口縁近くで直線的となる。やや外反する口縁端は円くおさまられている。体部の中ほどを明瞭な稜によって屈曲させている点特徴的である。高台が大きく外方に張り出すため低目の印象を受ける。砂粒を混じえた胎土を硬質に焼成している。調整は内外ともにやや粗雑であり、そのためにこの埴を流麗さとは縁遠いものにしてている。内面は全体に横方向のヘラミガキが施されているが、粗雑である。黒色ないしは銀白色を呈する。体部外面はヨコナデ調整されているが、やはり粗雑である。やや茶色を帯びた灰白色を呈している。

越州窯青磁 (215) は埴で、同一個体が 3 片出土しており、約 1/2 残存する。口径 11.2 cm、器高 3.7 cm に復原される。精選された胎土をきわめて堅緻に焼成している。体部はやや内彎しつつ立ち上がるが、口縁付近で直立する。そのため全体に強く内彎する印象を受ける。上げ底気味の底部は下から 0.3 cm ほどを削り取り高台状をなしている。露胎は暗い小豆色であるが、外底部・体部外面下半を除き緑色を帯びた灰褐色の釉をかけている。同形でやや大形の例が東西溝 (SD866) から出土している。

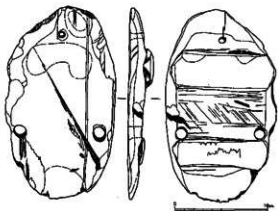
#### 瓦 埴 類

今回の調査で出土した瓦埴類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦・無文標の埴などであ

る。丸瓦・平瓦が大半で、井戸（SE 868）の底に敷かれていた他、遺構埋土などから出土しているが、量的には少ない。軒瓦は軒丸瓦1点、軒平瓦3点が出土しているが、いずれも細片である。軒丸瓦は複弁の蓮華文の配された内区の一部のみが残っている。軒平瓦の細片にはいずれも上外区に珠文、内区に偏行唐草文を配している。老司Ⅰ式1点、老司Ⅱ式2点である。文字瓦は3点出土しており、「佐」「前」「王」銘のものである。

#### 木製品（第35図）

井戸（SE 870）中から曲物の底と思われる薄板や足駄などの木製品が出土している。足駄はほぼ完形であるが、台部の周囲に欠損がみられる。一枚の板材を削りだした運搬の足駄で、長楕円形を呈する。よく使用されており、そのため指圧による窪みや歯部底面・台部後方の擦り減りが顕著である。鼻緒孔は前が径0.5cm、後が1.2cmで、それぞれ歯部の前に穿たれている。長20.7cm、幅11.8cm。



第35図 SE870出土足駄実測図

#### 小 結

今回の調査では目的とした遺構の確認、第28次発掘調査に関連する遺構、あるいは観音寺公文所別当屋敷、のいずれをも確認することはできなかった。第28次地点とは出土遺物の時期に大きな開きがあるが、何に起因するか明らかでない。

完掘した井戸4基の時期はそれぞれおよそ次のように考えられる。まずもっとも古く位置づけられるのは下層遺構のSE 872である。井戸中から出土した黒色土器、あるいは井戸埋土中に掘り込まれていたピットから出土の土師器はほぼ同じ時期の所産であり、その時代的位置づけからみて、この井戸は平安時代前期末にはすでに埋没していたと考えられる。SE 867・SE 870の場合、井戸中からは土師器が出土し、それらは底部がヘラで切り離されていた。それに対し、井戸埋土からは底部を糸切り離された土師器や瓦器・青磁・白磁などが出土している。すなわちこの二つの井戸は、土師器の底部の切り離し技法がヘラ切りから糸切りに転換する時期に掘り込まれ埋没しているといえる。したがって平安時代中期頃に使用されたものであろう。土器の出土量は少なかったが、SE 868も同様の時期の可能性がある。またSE 871は、SE 870によって切られており、それに先行する。したがって今回調査の井戸は平安時代前～中期に属するといえる。

註1 九州歴史資料館「大宰府史跡」昭和48年度発掘調査概報 1974.3

なお、地番を太宰府町大字観世音寺字土井の内359としていたが、字寫切90-1、2の誤りである。訂正しておきたい。

註2 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚書」(九州歴史資料館研究論集 2) 1976

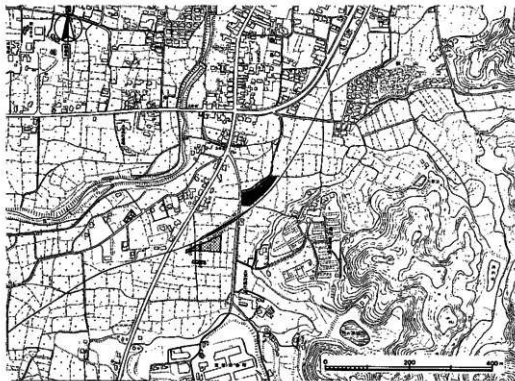
## 5 第40次調査

第40次調査として、条坊復原案による左郭へ条二坊推定地の調査を行った。今回の調査は店舗建設による事前調査である。

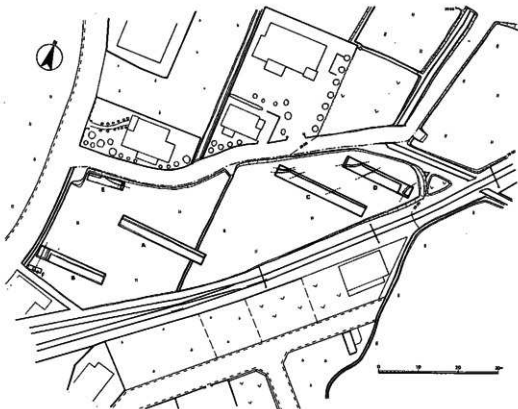
調査地域は西鉄五条駅の東北方に接した位置にある。調査地の南方には高雄山からのびる比高約10m位の台地があり、今回の調査地はその裾部にあたる。

地番は筑紫郡太宰府町大字太宰府字鉢浦 9286-1、2981-1、2981-3番地である。発掘調査は昭和50年11月11日から開始し、12月10日に終了した。

発掘区設定にあたり、南北方向の溝等の遺構を予測し、東西方向に幅3mのトレンチA・B



第36図 第40次発掘調査地周辺図



第37図 第40次発掘調査トレンチ配置図

・C・D・Eを設定した。そして遺構の状況によっては一部拡張しながら適宜調査を行なう事で計画した。

因に当調査地は、前記したが鏡山猛氏の条復原案では左郭へ条土坊に推定されており、氏はさらに「八幡字佐御神領大鏡」にみえる府中宇佐町を調査地に隣接する東南の丘陵地に比定されており、その四至は「東限京極大路、南限田、西限馬出子午小道北限馬場。」とあることから、この子午小道は土坊と土坊を限る小道であろうかと考えられている。また、さらに昭和49年度の第33次調査においては、南北方向の2条の溝を検出し、東側の溝からは貞応3年の紀年のある木札が出土している。とくに、この溝が政庁中軸線からほぼ9町の距離にあることが注意され、この溝の東側では多数の柱穴と思われる小ピット群と井戸等を検出し、ここが中世の集落跡であった可能性が確認されている。

このような事から、当調査地でも関連する遺構が予測されたが、調査の結果、中世の谷の氾濫によるため当初考えていた遺構は検出できなかった。

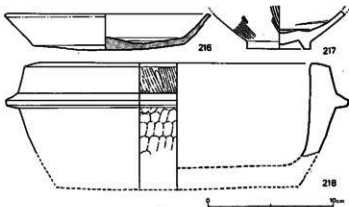
## 検出遺構

調査地域に東西方向のトレンチ4を設定し、調査した。調査の結果は各トレンチとも遺構（層位）の状況に大差なく当初予測した溝等の遺構は検出できなかった。Aトレンチにおいて表土下約50cmのところ江戸時代以降のものと考えられる畝状の遺構を検出したが、さらに下層の状況を知るため幅1mを掘り下げ遺構の確認を行った。しかしながら下層は粘質土および砂が互層になっており、柱穴等の遺構らしきものは確認できず、表土下約2m位の所で砂礫層を確認した。第33次調査の下層でも無遺物の砂礫層があり、それとの関連が考えられた。粘質土および砂の層にはわずかに中世の土師器、磁器、石銅片がみられるのみで、これらの層は流れによる堆積と考えられた。

## 出土遺物（第38図 216～218）

出土した遺物はきわめて少なく、ほとんどが小片である。(216)～(218)はCトレンチの青灰砂質土層から出土したものである。

(216)は土師器の坏で口径16.3cm、器高2.9cmのもので、底部の切り難しは糸切りで、兼状圧痕を有する。(217)は青磁の碗の破片で、外体部に櫛のカキ目



第38図 第40次発掘調査出土遺物実測図

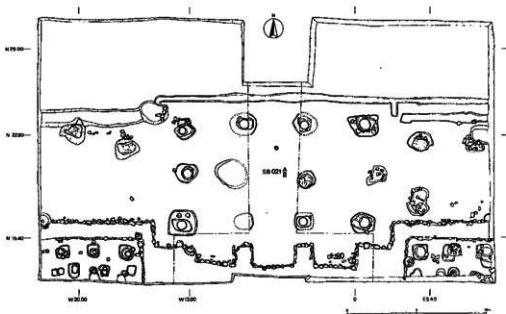
があり、ヘラ描き文様がみられる。釉はやや青味を帯びた緑色を呈し、高台内面には施釉されていない。(218)は滑石製の石鍋で復原口径24.4cmをはかる。口縁部下に削り出した鏝をめぐらす。外面はノミ状工具によって削り痕が明瞭で、内面および鏝部は研磨されているためか、その痕跡はない。やや青味を帯びた灰色で、鏝以下は煤で黒くなっている。

註1 平安遺文2697号文書

註2 鏡山種『大宰府都城の研究』風間書房 1968

註3 九州歴史資料館『大宰府史跡』—昭和49年度発掘調査概報—1974





第39図 中門遺構配置図

## 8 第1次調査補足

昭和43年11月から開始された大宰府史跡の第1次調査は、まず政庁跡の遺構の状況を把握するとともに、遺構の軸線を確認し今後の調査の基準にするという視点から南門・中門において行われた。その調査結果についてはすでに報告されているとおりである。

この第1次調査時においては南門と中門の基壇中央部を南北に道路が通っていたため調査ができず、このため中門の階段部分について若干の問題点が残されていた。

一方昭和45年度から開始された大宰府史跡環境整備事業の進展とともに昭和50年度事業の一環として未整備のまま残されていたこの南門、中門の道路敷部分について整備事業が行われることとなったため、その事前に未調査部分についての調査を行うこととした。

調査は南門については第1次調査結果からみて、道路敷部分はすでに遺構は削られていると判断したため中門についてのみ行うこととした。10月22日から開始し11月5日に終了した。次にこの調査結果について述べる。

### 検出遺構

中門の遺構については、すでに昭和43年度調査概報で報告されているが、記述の都合上その概略を述べると次のとおりである。

中門基壇は東西17.5mで門の建物は梁行2間、桁行3間で柱間寸法は梁行3.5m、桁行4.5mである。この基壇の東西両脇には幅7mの回廊基壇がとりつく。

また基壇南側には3柱間のそれぞれに階段がつくのであるが、中央間の階段部分が未調査であり、その状況を確認することが今回の調査の目的であった。調査の結果は第1次調査で検出した東・西両脇の階段と同じ状況で、中央部にも階段のつくことが明確となった。

中央階段は幅3.3m、奥行1.5mの張出しがあり、周囲に人頭大の石が一列残っている。

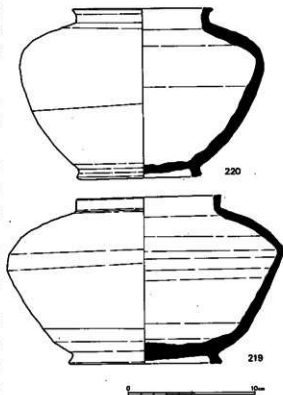
この石の上端と現存する礎石とのレベル差は約45cmであり、また東側の階段には張出し部のほぼ中央に東西に数個の石が残っており、これから判断して比較的「踏み代」の幅が広い階段が想定される。

#### 出土遺物(第40図219、図版31)

今回の中門跡の補足調査で完形の短頸壺(219)が出土した。以前、昭和43年度の第1次調査において南門跡からこれに非常に類似している短頸壺(220)が出土しており、この機会にあわせて報告したい。

須恵器(220)は南門跡から出土したもので、完形である。短い頸部は直立しているが、口縁部は軽く外反させ、端部は平らにおさめている。ほぼ直線的な肩部から円くならかな曲線で胴部にいたる。胴部はやや内彎気味で、肩部と胴部の境は明瞭でなく、内面の肩部と胴部の境の部分がへこみ器内がうすくなっている。高台は低く肉厚で、ほぼ直立しわずかに外へね上げ、端部は平らである。胴部の3分2のところまでへら削り再調整を行っており、他は全てヨコナデである。胎土は精製された緻密なもので灰白色を呈する。口径12.2cm、器高13.6cm、高台径9.9cm、体部最大径19.4cmをはかる。肩部から底部には朱が塗ってあり、壺内部には8個の水晶と数個の小石が埋納されていた。

(219)は今回の補足調査で検出したもので、出土の地点は中門のほぼ中心線上に位置してい



第40図 南門・中門出土短頸壺実測図

る。出土状態は、ほぼ水平に座っていた。全面にわたって細かいヒビ割れがあったが完形のものである。

前述の(220)に大きさ等類似しているが若干異った所がみられる。全体に器肉がうすく、焼きひずみがみられる。頸部は直立しており、口縁部はやや肥厚し端部は平らである。やや内彎気味の肩部からやや鋭角の曲線で胴部にいたる。肩部と胴部の境界には軽い稜をもつ。胴部は直線的で、胴部下位から底部にかけて内彎し稜をもつ。高台は(219)同様低いが、外方に開いている。端部は平らで高台径も大きく安定した感じである。ヘラ削りの再調整は胴部の3分1まで行なわれている。胎土は砂粒の混入が目立ち粗いが焼成は堅緻で調整も丁寧である。口径は11.0cm、器高13.4cm、高台径12.2cm、体部最大径22.0cmをはかる。前者同様、肩部、胴部、脚部に部分的に朱がみられる。壺内には7個の水晶と琥珀かと思われる小豆色を呈すものが9個、それに小石9個が埋納されていた。

前記した2個の壺は出土状態や壺の外面に朱を塗ってあり、また壺内に水晶等の埋納物があることから、遺棄されたものではなく、地蔵に用いられたものと考えられる。

壺の形状を比較すると非常に類似しているものの若干差異がみられる。(220)は肩の張りが上位にあり、肩部から胴部の曲線は流麗で端正である。胎土、調整、手法もきわめて丁寧で精良のものである。(219)は前者に比較すると胎土、調整、手法にやや粗さがみられ肩の張りがやや大きく、下位にあり、全体の形状から受ける感じはざんぐりした感じである。

註1 福岡県教育委員会『大宰府史跡』昭和43年度調査概報 1969.3

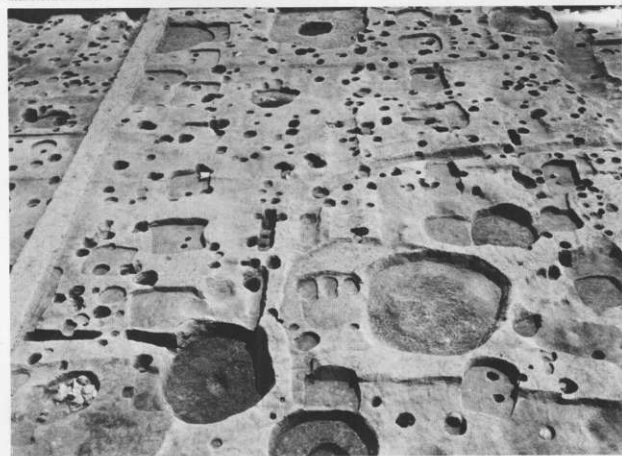
## 付録 学校院関係年表

西暦	和 暦	事 記	出 典
701	大宝 1	大宝律令の制定。大宰府の職制整う。(府学校成立)	続日本紀
734	天平 6	入唐留学生下道真備帰国。将来する孔子像等を学業院に安置す。	江 次 第
738	天平 10	吉博士山背味耜、故大武紀男人的骨送使として周防国を通過す。	周防国正税帳
754	天平 勝宝 6	吉備真備を大武に任ず。	続日本紀
769	神護 景雲 3	大宰府、府庫に三史の正本がなく、列代譜史各一本を請う。	続日本紀
781	天応 1	管内に学校料田を設く。府学校に学生・医生・算生200余人あり。	類聚三代格
799	延暦 18	大宰府に明法博士を置く。	類聚三代格
814	弘仁 5	大宰府に算師一員を増す。	類聚三代格

西暦	和 暦	記 事	出 典
825	天長 2	明法博士の官位を従七位下官と定む。	類聚三代格
841	承和 8	明法博士伴宗、右少史に転任す。	文徳天皇実録
860	貞観 2	釈良は2座となる。	類聚三代格
863	貞観 5	大宰医師民方兼に真野臣の姓を賜う。	三代実録
864	貞観 6	前大宰博士山口西成没す。	三代実録
876	貞観 18	釈良は、旧例により、先聖・先師・関子堂の3座に復す。	類聚三代格
903	延喜 3	津良行を大宰博士に、孔王部當世を大宰医師に任ず。	除目大成抄
927	延長 5	延喜式成る。関係規定あり。	延喜式
952	(天徳2) 天曆 12	学校院、所領公驗を申立てる。	観世音寺文書
973	天禄 4	学校院焼亡す。	観世音寺文書
1021	寛仁 5	観世音寺、学校院別当の同寺領を妨ぐるの停止せられんことを請い、ついで大宰府これを裁許す。	観世音寺文書
1033	長元 6	権師源道方、観世音寺四至に斤判を与う。	観世音寺文書
1038	長暦 2	学校院、学校院東小路東地2段について、大宰府の下文を得る。	観世音寺文書
1045	寛徳 2	府政所、学校院と府老千兼等の妨を停止し、観世音寺をしてその四至内を領知せしむ。	観世音寺文書
1058	天喜 6	観世音寺、学校院が寺家四至内の開墾田2段を学校院領として地子米を助買することの判定を大宰府に請い、ついで府これを裁す。	観世音寺文書
1059	康平 2	府政所、左衛門に令して、学校院東小路東地2段を観世音寺に領掌せしむ。	観世音寺文書
1068	治暦 4	府政所、左衛門に令して、学校院東小路東地2段を観世音寺に領掌せしむ。	観世音寺文書
1072	延久 4	府政所、左衛門に令して、学校院東小路東地2段を観世音寺に領掌せしむ。	観世音寺文書
1095	嘉保 2	権師源経信若任し、学院を視察す。	民経記

この概報の執筆、編集は、当館調査課の石松好雄、横田賢次郎、高倉洋彰、倉住靖彦、森田勉、高橋繁および調査補助員山本信夫、沢田康夫、松沢直子がこれにあたった。写真撮影は学芸第一課の石丸洋による。

# 圖 版



図版1 (上)第36次発掘調査全景 (下)SE700建物



図版2 (上) SB705建物, SE726井戸, SE740井戸 (下) SE710建物



図版 3  
(上)SB690建物  
(下)SB715建物  
SE725井戸



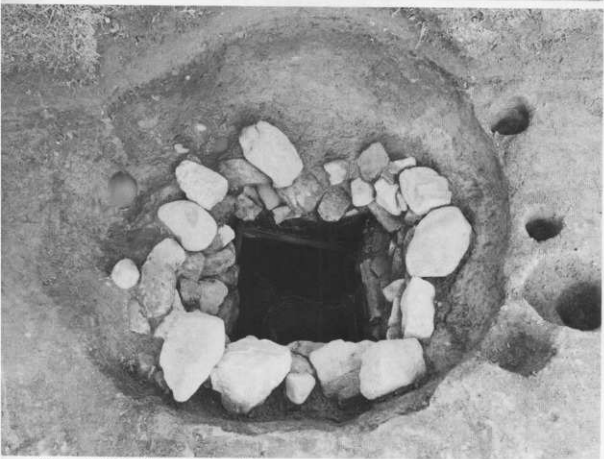




図版4 (上) SE725井戸 (下) SE721井戸



図版 5 (上)SE722井戸 (下)SE723井戸



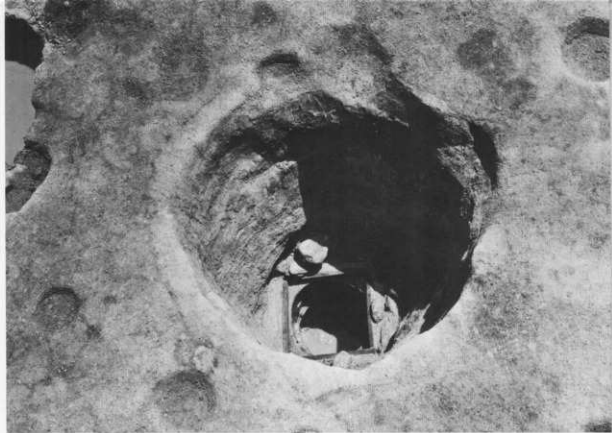
图版 6 (上)SE724井戸 (下)SE725井戸



図版7 (上)SE727井戸 (下)SE728井戸



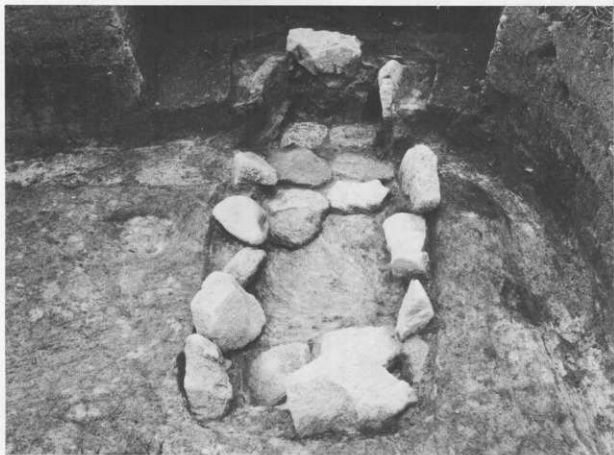
図版 8 (上)SE729井戸 (下)SE730井戸



図版9 (上)SE735井戸 (下)SE726井戸, SE740井戸



图版10 (上)SE745井戸 (下)SE750井戸



图版11 (上)(下) SX692墓





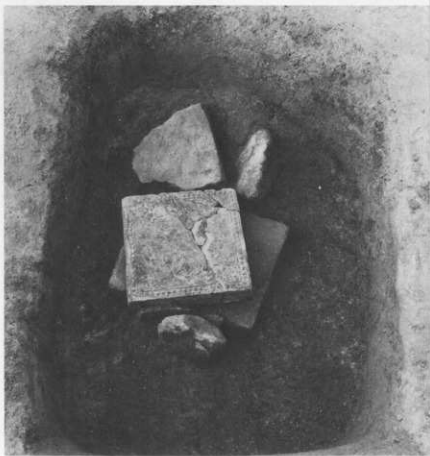
図版12 (上)37次発掘調査全景 (下)SB775建物, SB780建物



図版13

(上)SB765建物

(下)SB765建物柱穴内  
文様埴

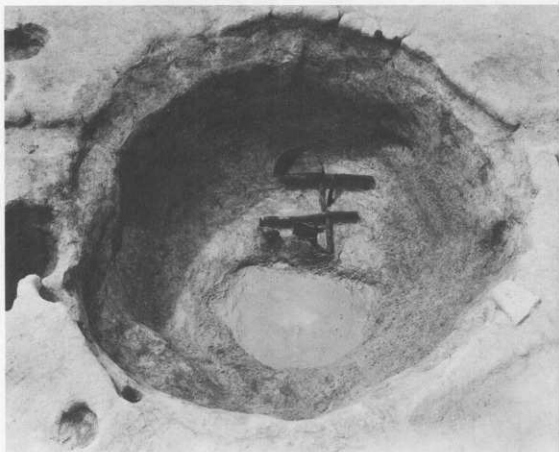


図版14

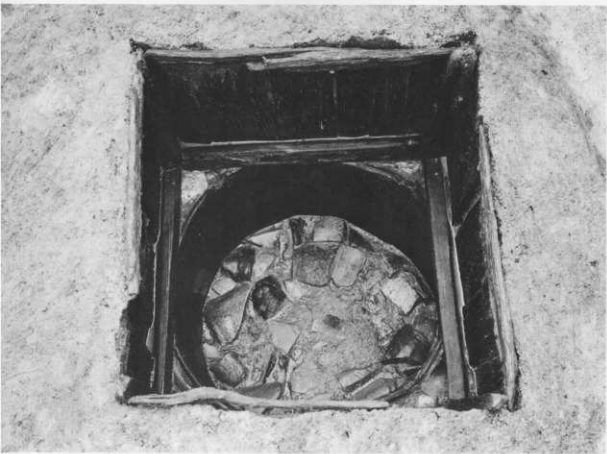
(上) SA770柵

(下) SX754石組遺構





图版15 (上)SE7 771井戸 (下)SE772井戸





图版17 (上)(下) SE872井戸



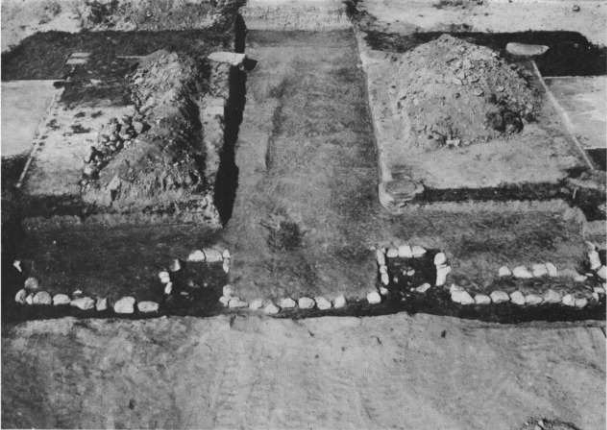
圖版18 (上)SE867井戸 (下)SE870井戸

図版19

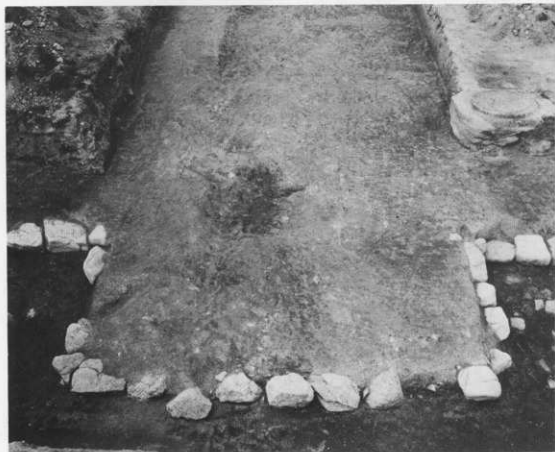
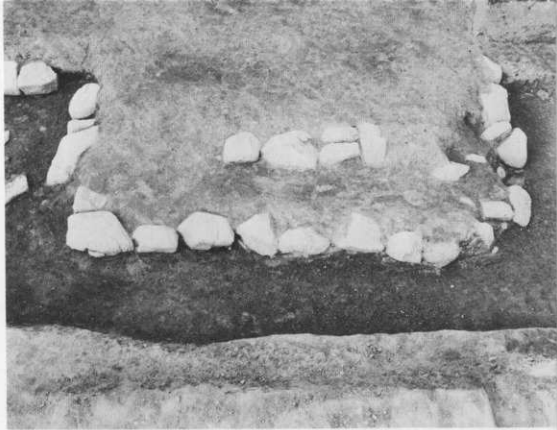
(上)(下)第40次発掘  
調査全景







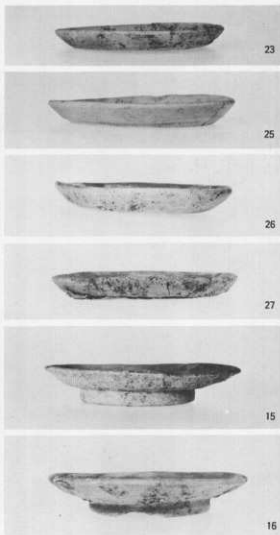
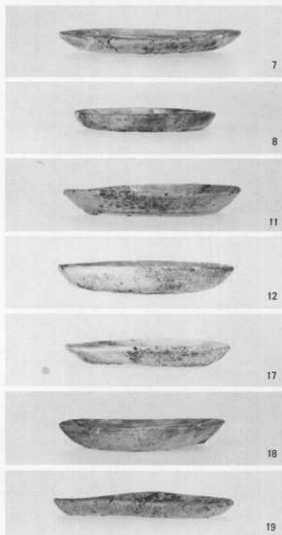
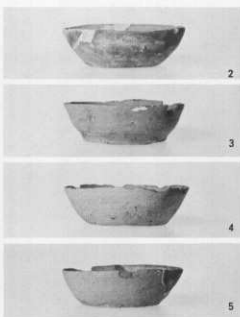
図版20  
(上)中門全景  
(下)中門階段



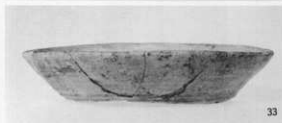
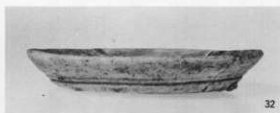
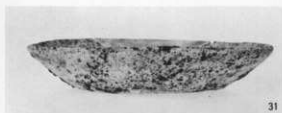
図版21 (上)中門東側階段 (下)中門中央階段



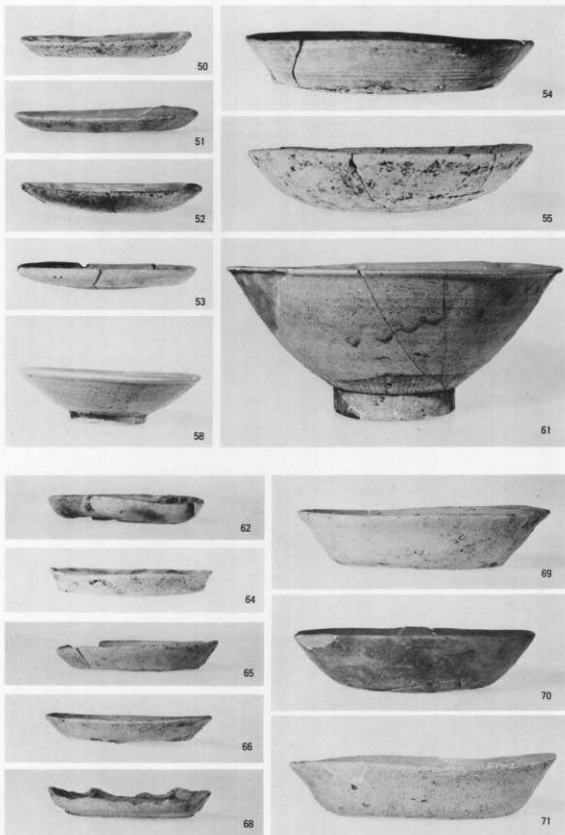
圖版22 (上)中門全景 (下)短頸壺出土狀況



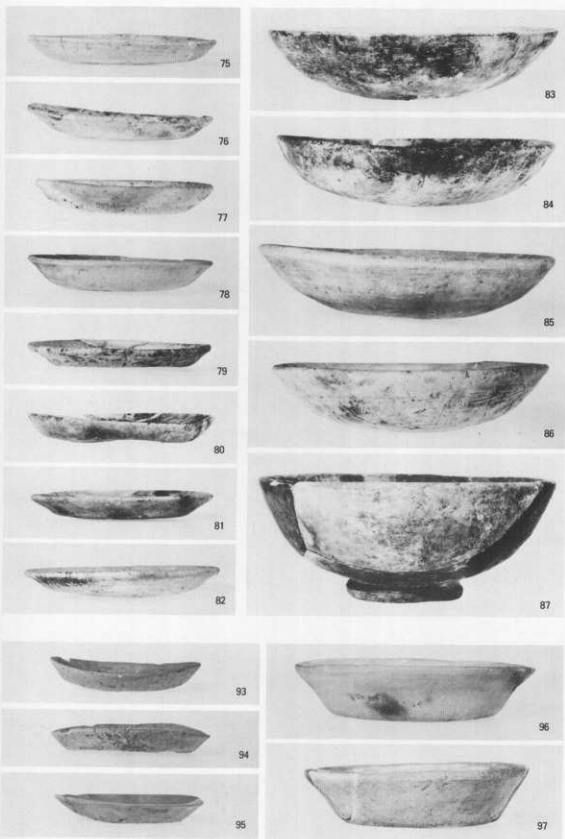
図版23 第36次発掘調査 掘立柱建物SE700・SE720・SE721出土土器



図版24 第36次発掘調査 井戸SE721出土土器



図版25 第36次発掘調査 井戸SE723・SE724出土土器



図版26 第36次発掘調査 井戸SE725-SE728出土土器



99



100



103



107



129



108



130



110



111



112



131



132



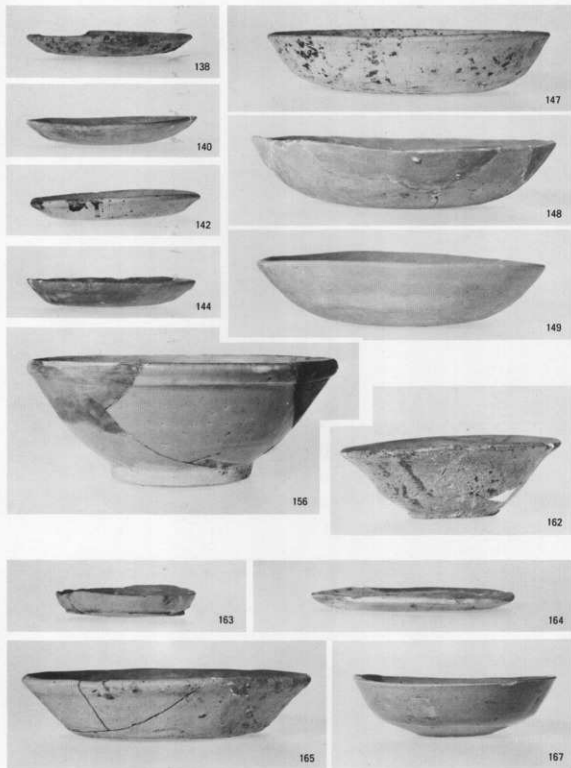
133



135

図版27 第36次発掘調査 井戸SE729・SE730・SE735・SE740・臺SX692出土土器





図版28 第37次発掘調査 井戸SE772・SE771およびSX751出土土器



168



171



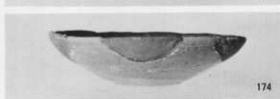
169



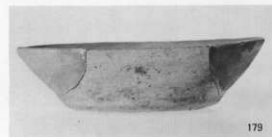
172



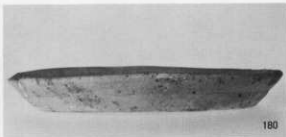
170



174



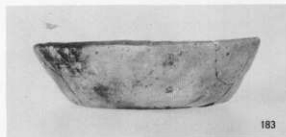
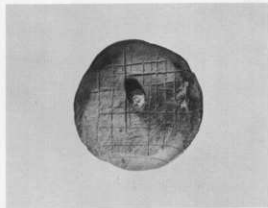
179



180



182



183



鏡

図版29 第37次発掘調査 土坑SK762・落ち込みSD752  
・掘立柱建物SB765・SB760出土土器および鏡状土製品



187



188



193



197



194



198



196



201



208



202



213



215



214

图版30 第39-1次発掘調査出土土器



219



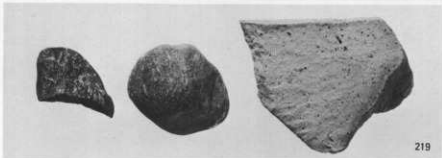
220



219……中門出土土器  
および埋納品



220……南門出土土器  
および埋納品



219

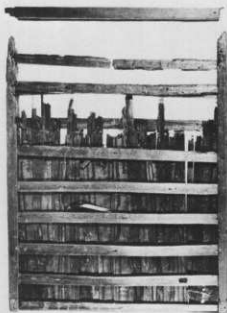
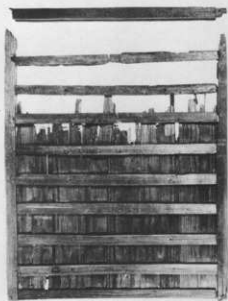


220

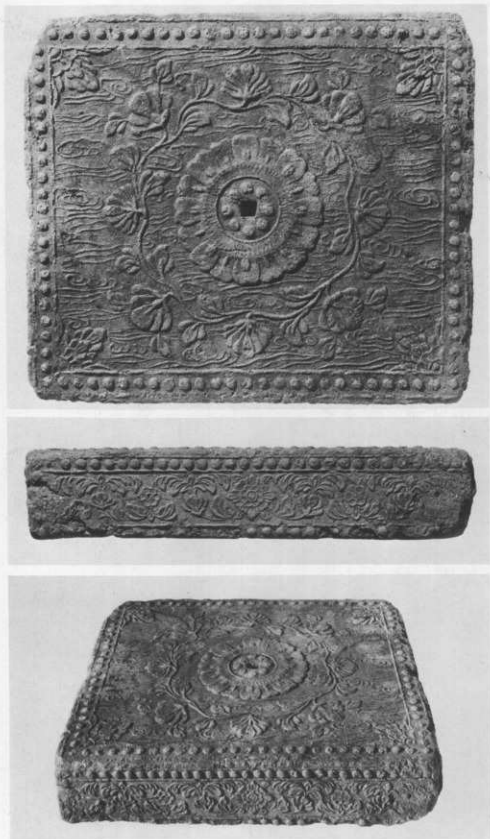
図版31 第1次調査補足出土遺物および南門出土遺物



図版32 第36次発掘調査 出土木製品



図版33 第36次発掘調査および第37次発掘調査出土遺物



图版34 第37次発掘調査 掘立柱建物SB765柱穴出土文様埴

大宰府史跡

昭和50年度発掘調査概報

昭和51年3月

発行 九州歴史資料館  
筑紫郡大宰府町大字大宰府字太郎左近1025

印刷 秀巧社印刷株式会社